

## 第4章 児童・生徒アンケート調査の分析

「情報化が子どもに与える影響」についての児童・生徒へのアンケート調査は、小学生 1169 名、中学生 1164 名、高校生 732 名、計 3065 名の児童・生徒から回答を得た。ここでは、子どもの「インターネット依存」傾向を尋ねる 8 項目の質問、及びインターネット利用による子どもの変化を尋ねた質問への回答を軸に、(1)家庭・親子関係及び友人関係と「インターネット依存」傾向との関連、(2)ゲーム機及び携帯電話利用実態と「インターネット依存」傾向との関連、(3)「インターネット依存」傾向と子どもの変化との関連、(4)情報モラル教育と「インターネット依存」傾向との関連について分析と考察を行う。ついで、(5)「インターネット依存」傾向の構造について分析、考察を行うこととする。

「インターネット依存」傾向を尋ねた質問は以下の通りである。

4.インターネットを利用して次のようなことがありますか？

- 4 1 1: つなぐ時間が最初に思っていたより長くなることがある
- 4 1 2: 家族といっしょにいるよりインターネットにつないでいる方が楽しいと感じる
- 4 1 3: 友達といっしょにいるよりインターネットにつないでいる方が楽しいと感じる
- 4 1 4: 「インターネットにつなぐ時間が長すぎる」と注意されることがある
- 4 1 5: インターネットで何をしているか家族にきかれてもかくすことがある
- 4 1 6: インターネットにつなぐことで、ふだんの生活のいやなことを忘れる
- 4 1 7: インターネットにつなぐのをだれかにじゃまされるとひどく腹が立つことがある
- 4 1 8: インターネットからはなれると、とたんにおちこんだり不安になったりすることがある

1.よくある 2.時々ある 3.あまりない 4.ない (1つに )

これらの質問群によって、何点以上が「インターネット依存」症という判定を行うのではなく、「インターネット依存」的傾向の度合いを測る。この回答を、『1.よくある』=4点、『2.時々ある』=3点、『3.あまりない』=2点、『4.ない』=1点として得点化し合計点を算出した。つまり、合計点が高い者ほど「インターネット依存」傾向が高いことになる。また、4 1 1~4 1 8で1つでも無回答があるものは除外した。そして、小学生、中学生、高校生とも、低群7割、中群2割、高群1割に分布するように次のようにグループ分けをした。

小学生	中学生	高校生
高群:17点以上	高群:21点以上	高群:21点以上
中群:13~16点	中群:16~20点	中群:16~20点
低群:8~12点	低群:8~15点	低群:8~15点

また、インターネット利用による子どもの変化を尋ねる質問は以下の通りである。

4 2: インターネット (メールを含む) を利用するようになって変わったことがありますか? (いくつでも )

- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| 1. 疲れやすくなった          | 2. 疲れやすくなった          |
| 3. イライラする            | 4. イライラしなくなった        |
| 5. 睡眠時間が減った          | 6. 睡眠時間が増えた          |
| 7. 性格が荒っぽくなった        | 8. 性格がおだやかになった       |
| 9. 自分の言いたいことが言えなくなった | 10. 言いたいことが言えるようになった |
| 11. 勉強が面白くなった        | 12. 勉強が面白くなった        |
| 13. 学校が前より好きでなくなった   | 14. 学校が前より好きになった     |
| 15. 家族との会話が減った       | 16. 家族との会話が増えた       |
| 17. 友人の数が減った         | 18. 友人の数が増えた         |
| 19. 友人とがなすことが減った     | 20. 友人と話すことが増えた      |
| 21. 生活の楽しみが減った       | 22. 生活の楽しみが増えた       |
| 23. 以前と変わらない         |                      |

これらの選択肢全てについて、個別にクロス分析などをしていっても統計的にあまり意味がないため、プラス面の変化(選択肢 2~22 の偶数番)及びマイナス面の変化( 選択肢 1~21 の奇数番 )のそれぞれについて の数を合計して、『子どもの変化・プラス面』及び『子どもの変化・マイナス面』を算出した。そして、小学生、中学生、高校生とも、できるだけ低群 7 割、中群 2 割、高群 1 割に分布するように次のようにグループ分けをした。

<b>プラス面</b>	小学生	中学生	高校生
	高群:4 個以上	高群:3 個以上	高群:3 個以上
	中群:1~3 個	中群:1~2 個	中群:1~2 個
	低群:0 個	低群:0 個	低群:0 個
<b>マイナス面</b>	小学生	中学生	高校生
	高群:3 個以上	高群:2 個以上	高群:2 個以上
	中群:1~2 個	中群:1 個	中群:1 個
	低群:0 個	低群:0 個	低群:0 個

## 1. 家庭・親子関係及び友人関係と「インターネット依存」傾向との関連

### 1) 家庭・親子関係と「インターネット依存」傾向との関連

ここではまず、家庭・親子関係と「インターネット依存」傾向との関連について分析を行う。家庭・親子関係について尋ねた質問は以下の通りである。

5 2:あなたは家族との会話は十分していると思いますか？

1.そう思う 2.どちらかというと思う 3.どちらかというと思わない  
4.そう思わない

5 3:外でいやなことがあったとき、家に帰って家族といっしょにいるとほっと出来ますか？

1.ほっとできる 2.どちらかというほっとできる 3.どちらかというほっとできない  
4.ほっとできない

この2つの質問への回答と、「インターネット依存」傾向、及びインターネット利用による子どもの変化(プラス面・マイナス面)との関連についてクロス分析を行った。その結果を表1.1.1に、その一部を図1.1.1~図1.1.7に示した。

小中学生においては、家族との会話の満足程度が低いほど、また、小中高生において、家庭でほっとできないと感じているほど「インターネット依存」傾向が高くなることが明らかとなった。小中学生に特に有意な差が見られたことにより、小中学生においては、「インターネット依存」傾向には、家庭・親子関係が強く影響を与えていることが分かる。家庭・親子関係での満たされない気持ちを解消するためにインターネットを利用している傾向があるのではないかと考えられる。

表1.1.1 家庭・親子関係と「インターネット依存」傾向との関連

(クロス分析の<sup>2</sup>検定)

	小学生	中学生	高校生
家族との会話 × ネット依存	*	***	
× 変化・プラス面			
× 変化・マイナス面	***	*	
ほっとする × ネット依存	**	***	*
× 子どもの変化・プラス面			
× 子どもの変化・マイナス面	*	*	

\*\*\*p<0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05

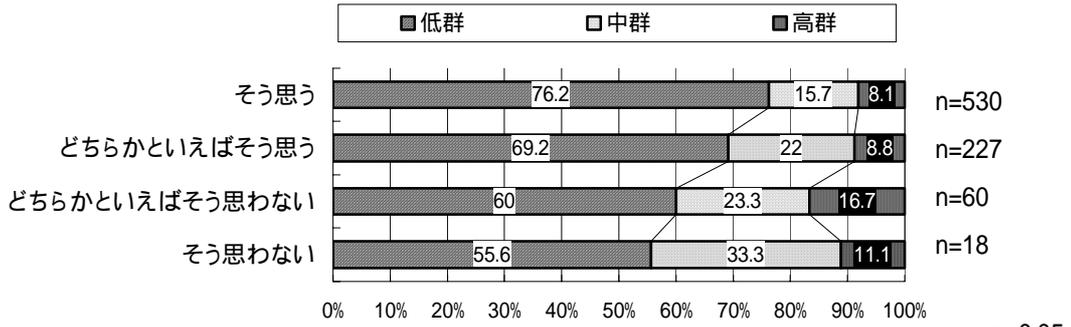


図1.1.1 「家族との会話は十分しているか」とネット依存傾向との関連 (小学生)  $p < 0.05$

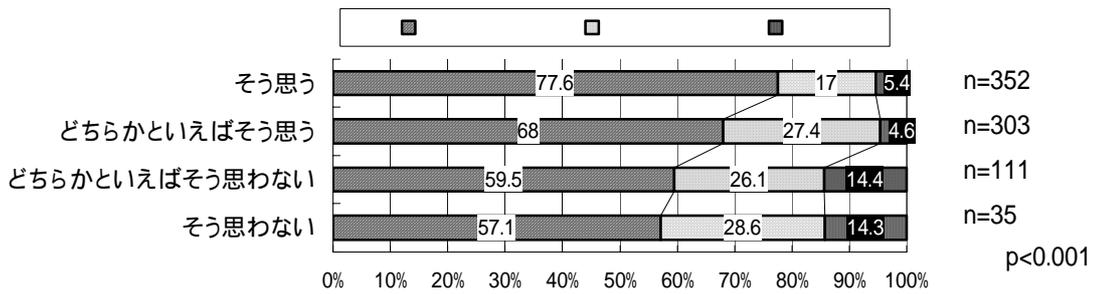


図1.1.2 「家族との会話は十分しているか」とネット依存傾向との関連 (中学生)  $p < 0.001$

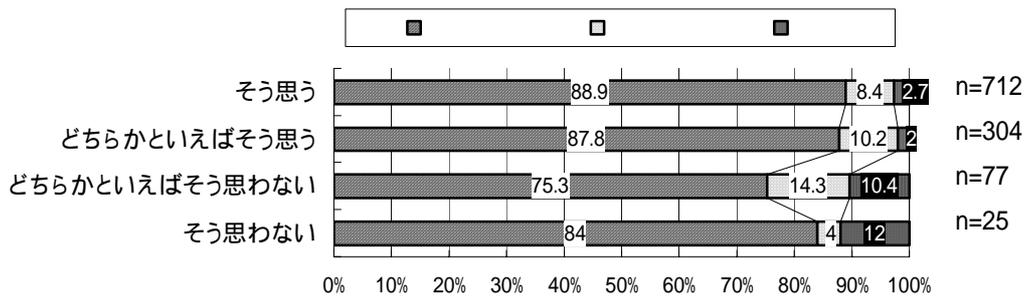


図1.1.3 「家族との会話は十分しているか」と子どもの変化・マイナス面との関連 (小学生)  $p < 0.05$

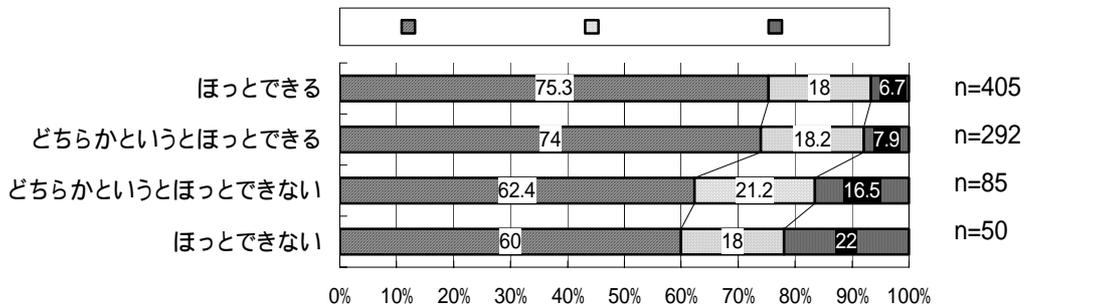


図1.1.4 「家に帰るとほっとするか」とネット依存傾向との関連 (小学生)  $p < 0.01$

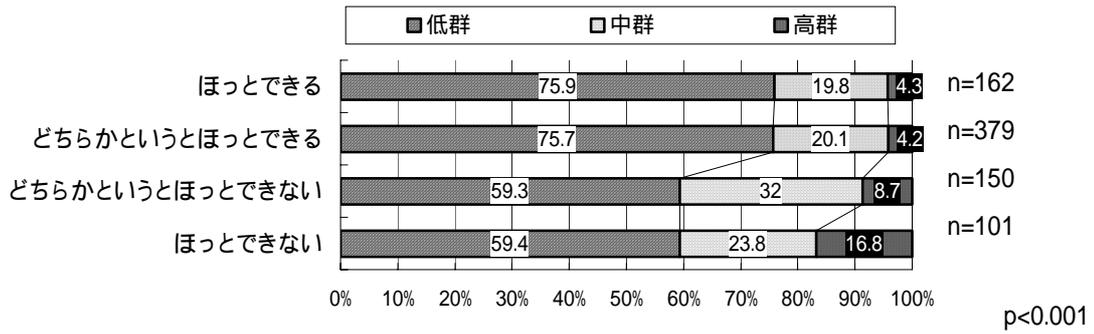


図1.1.5 「家に帰るとほっとするか」とネット依存傾向との関連 (中学生)

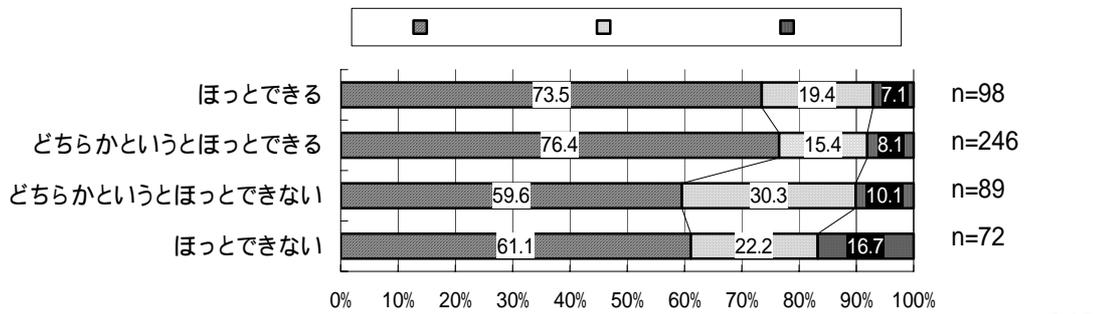


図1.1.6 「家に帰るとほっとするか」とネット依存傾向との関連 (高校生)

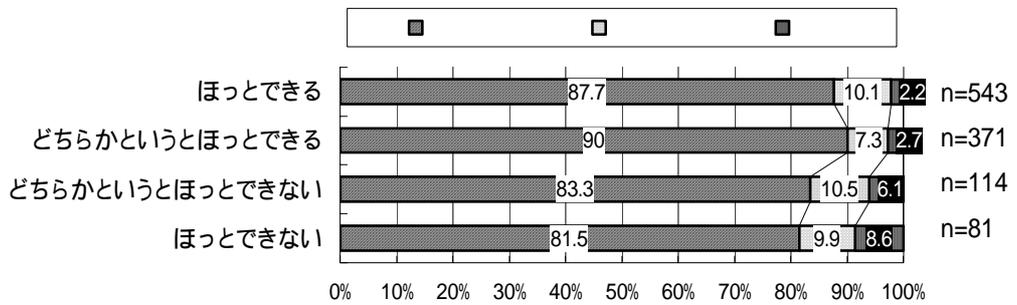


図1.1.7 「家に帰るとほっとするか」と子どもの変化・マイナス面との関連 (小学生)

## 2) 友人関係と「インターネット依存」傾向との関連

次に友人関係と「インターネット依存」傾向との関連について分析を行う。友人関係について尋ねた質問は以下の通りである。

5 1:学校に行きたくないと思ったことはありますか？
1.たびたびある 2.何回かある 3.1回だけある 4.昔あった 5.ない
5 4:あなたは、ふだんの友だちとの遊びやつきあいに満足していますか？
1.満足している 2.どちらかという満足している 3.どちらかという満足していない
4.満足していない
5 6 1:悩みを相談できる友達はいますか？
1.いる 2.いない 3.わからない
5 6 2:お互いに何も隠さずにつきあえる友だちはいますか？
1.いる 2.いない 3.わからない

この4つの質問への回答と「インターネット依存」傾向との関連についてクロス分析を行った。その結果を表1.2.1に、その一部を図1.2.1～図1.2.7に示した。友人関係と「インターネット依存」傾向との間においても、先ほどの家庭・親子関係と同様、小中学生にのみ有意な差が見られた。

表1.2.1 友人関係と「インターネット依存」傾向との関連

(クロス分析の<sup>2</sup>検定)

	小学生	中学生	高校生
学校に行きたくない × ネット依存	*	***	
× 変化・プラス面			
× 変化・マイナス面	**	***	
友達の満足度 × ネット依存	***	*	
× 変化・プラス面	*	*	
× 変化・マイナス面	*		
悩み友達 × ネット依存	*		
× 子どもの変化・プラス面	***	**	
× 子どもの変化・マイナス面	*	**	
隠し事のない友達 × ネット依存			
× 変化・プラス面	**	*	
× 変化・マイナス面			

\*\*\*p<0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05

学校に行きたくないと思うことがある者ほど、「インターネット依存」傾向が高くなる傾向にあることが明らかとなった。また、学校に行きたくないと思うことがあるものほど、インターネット利用によるマイナス面の変化が大きくなる傾向にある。小中学生は、学校生活への不

満からインターネットを利用する傾向があり、さらに健康面を中心にマイナス面の変化が生じるのではないかと考えられる。

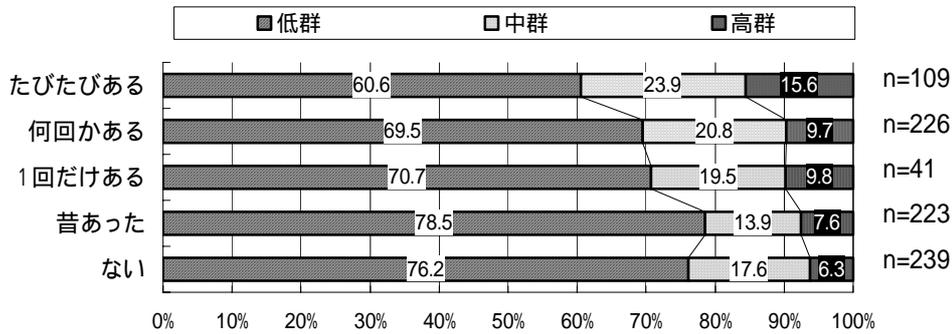


図1.2.1 「学校に行きたくないことがあるか」とネット依存傾向との関連 (小学生) p<0.05

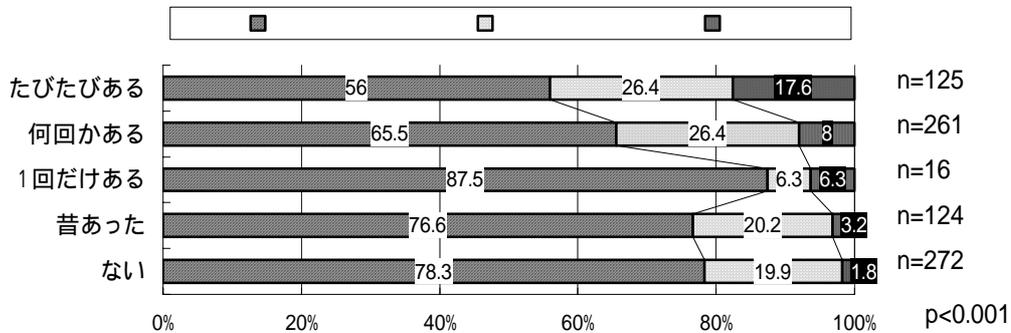


図1.2.2 「学校に行きたくないことがあるか」とネット依存傾向との関連 (中学生) p<0.001

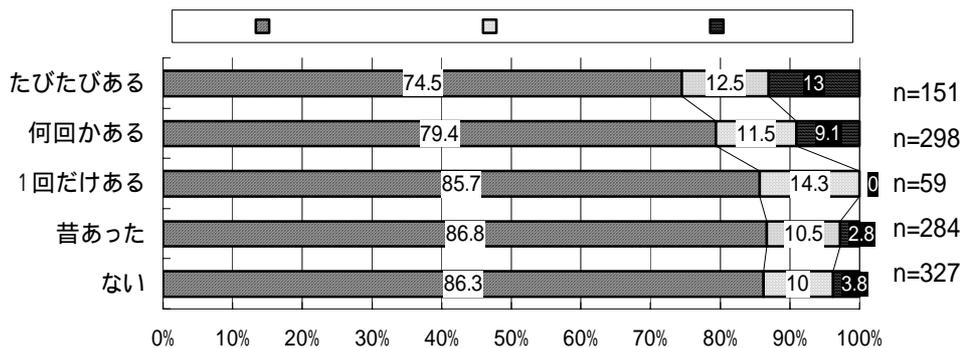


図1.2.3 「学校に行きたくないことがあるか」と子どもの変化・悪い面との関連 (中学生) p<0.001

友人の満足度と「インターネット依存」傾向との関連についても、先ほどの学校の場合と同様の結果が得られた。現実世界の友人関係の不満が「インターネット依存」傾向が高くなることへつながり、さらにマイナス面の変化につながる事が明らかとなった。プラス面の変化には顕著な差は見られなかった。

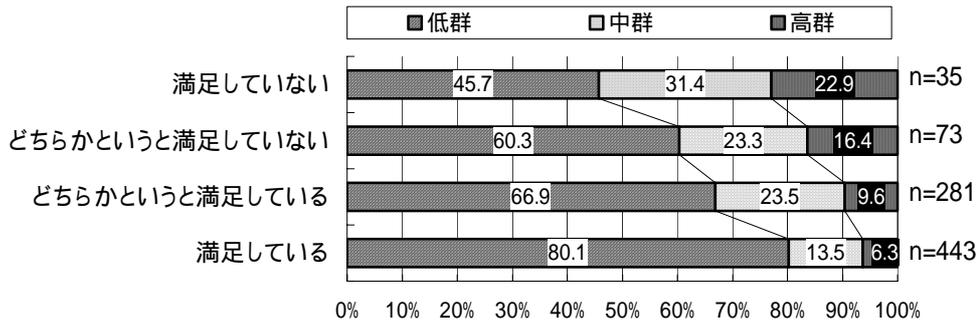


図1.2.4 「友達の満足度」とネット依存傾向との関連(小学生) p<0.001

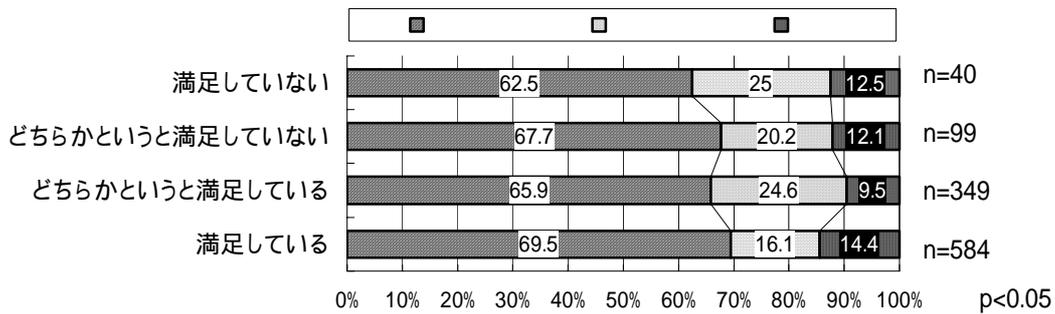


図1.2.5 「友達の満足度」と子どもの変化・プラス面との関連(小学生) p<0.05

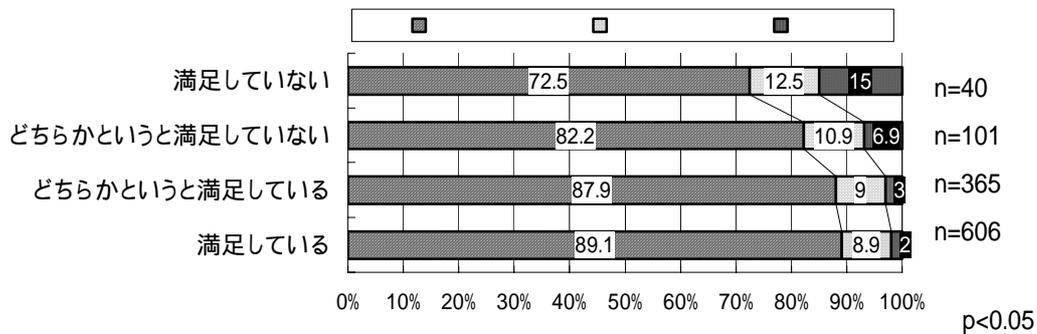


図1.2.6 「友達の満足度」と子どもの変化・マイナス面との関連(小学生) p<0.05

また、親密な友人(悩み事を相談できる、お互いに隠し事がない)が存在していることは、「インターネット依存」傾向を低くする作用があることが明らかとなった。また、インターネット利用によるプラス面の変化を多くする作用があると思われる。友人関係が良好なことは、インターネットの好ましい利用や効果をもたらすと推測できる。

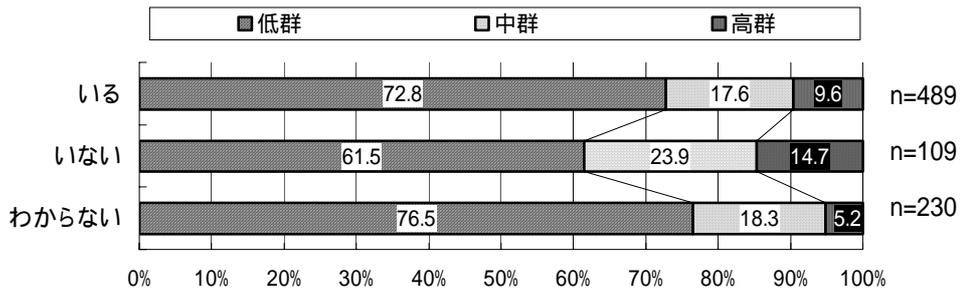


図1.2.7 「悩み友達の有無」とネット依存傾向との関連 (小学生)

p<0.05

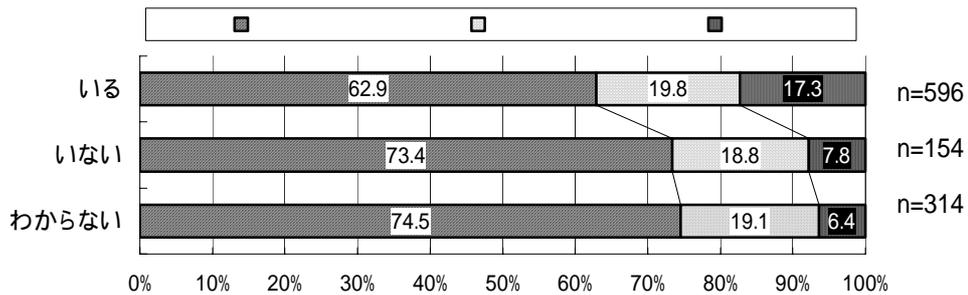


図1.2.8 「悩み友達の有無」と子どもの変化・プラス面との関連 (小学生)

p<0.001

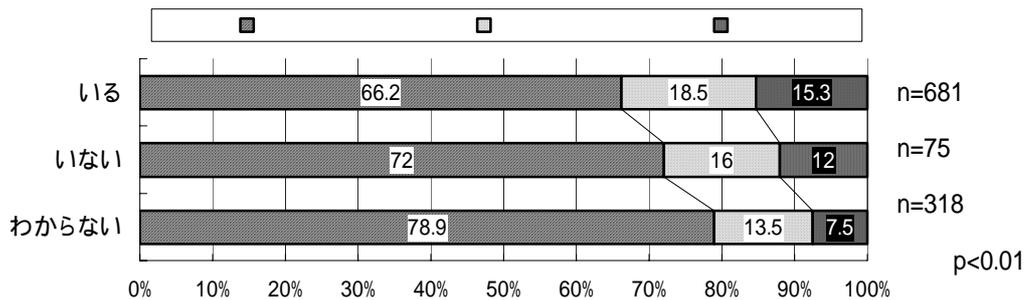


図1.2.9 「悩み友達の有無」と子どもの変化・プラス面との関連 (中学生)

p<0.01

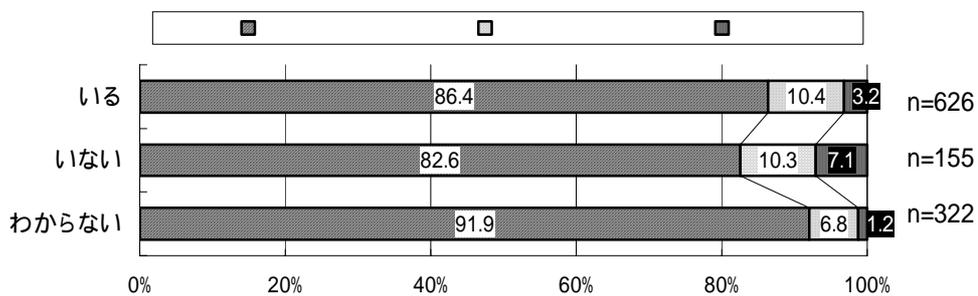


図1.2.10 「悩み友達の有無」と子どもの変化・マイナス面との関連 (小学生)

p<0.05

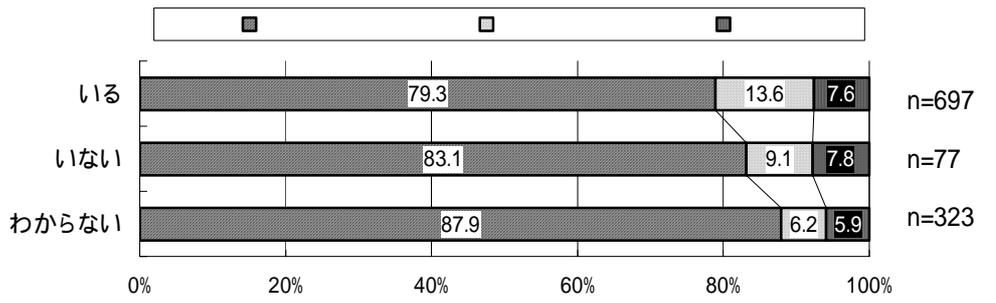


図1.2.11 「悩み友達の有無」と子どもの変化・マイナス面との関連 (中学生)

$p < 0.01$

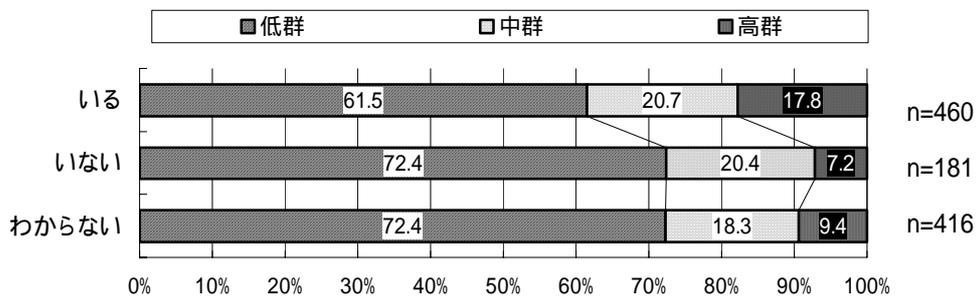


図1.2.12 「互いに何も隠さない友達の有無」と「子どもの変化・プラス面」との関連 (小学生)

$p < 0.001$

## 2. ゲーム機及び携帯電話利用実態と「インターネット依存」傾向との関連

### 1) ゲーム機の利用実態と「インターネット依存」傾向

ここでは、ゲーム機の所有及び利用頻度と「インターネット依存」傾向との関連を分析する。ゲーム機の所有及び利用頻度について尋ねる質問は以下の通りである。

2-1:あなたは次のものを持っていますか？				
2-1-2:ゲーム機	1.自分専用がある	2.家族と共用	3.ない	
2-2:あなたは次のものを1週間に何日くらい使いますか？(家や学校など場所はどこでもよい)				
2-2-2:ゲーム機	1.6日以上	2.4~5日	3.2~3日	4.1日以下 5.使わない

ゲーム機の所有及び利用頻度と「インターネット依存」傾向との関連についてクロス分析を行った。その結果を表2.1.1に示した。ゲーム機の所有及び利用頻度と「インターネット依存」傾向の間には有意な差がほとんど見られなかった。小学生において、ゲーム機の利用頻度とマイナス面の変化との間には有意な差が見られ、ゲーム機の利用頻度が多い者ほど、マイナス面の変化が大きくなることがわかった。

表2.1.1 ゲーム機の利用実態と「インターネット依存」傾向

(クロス分析の<sup>2</sup>検定)

	小学生	中学生	高校生
ゲーム機所有 × ネット依存			
× 変化・プラス面			
× 変化・マイナス面			
ゲーム機利用頻度 × ネット依存			
× 変化・プラス面			
× 変化・マイナス面	**		

\*\*\*p<0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05

### 2) 携帯電話の利用実態と「インターネット依存」傾向

次に携帯電話の所有及び利用頻度との関連性を分析する。携帯電話の所有及び利用頻度を尋ねる質問は次の通りである。

2-1:あなたは次のものを持っていますか？  
 2-1-3:携帯電話・PHS      1.自分専用がある      2.家族と共用      3.ない  
 2-2:あなたは次のものを1週間に何日くらい使いますか？(家や学校など場所はどこでもよい)  
 2-2-3:携帯電話・PHS    1.6日以上    2.4～5日    3.2～3日    4.1日以下    5.使わない

携帯電話の所有及び利用頻度と「インターネット依存」傾向との関連についてクロス分析を行った。その結果を表2.2.1、図2.2.1～図2.2.6に示した。

表2.2.1 携帯電話の利用実態と「インターネット依存」傾向

(クロス分析の<sup>2</sup>検定)

	小学生	中学生	高校生
携帯電話所有 × ネット依存	*		
× 変化・プラス面	***		
× 変化・マイナス面	***		
携帯電話利用頻度 × ネット依存	***		
× 変化・プラス面	***		
× 変化・マイナス面	***		

\*\*\*p<0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05

小学生は携帯電話を所有しているものほど、「インターネット依存」傾向が高くなり、また、インターネット利用による変化がプラス面、マイナス面ともに多くなる傾向にあることが分かった。小学生だけに有意な差が見られたのは、中学生、高校生のように携帯電話の所有率が高くない(自分専用/小学生:12.3% 中学生:42.7% 高校生:89.3%)ためではないかと思われる。

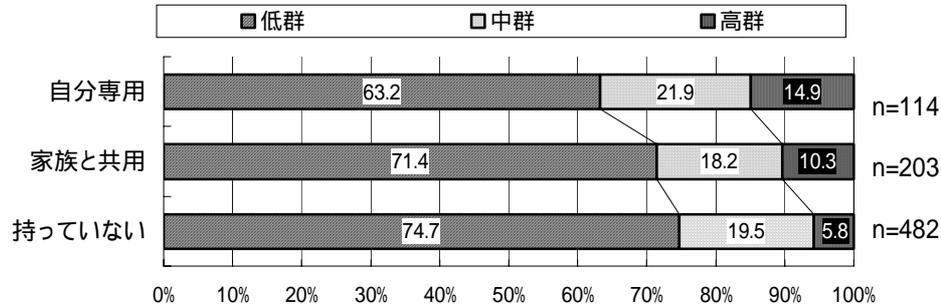


図2.2.1 携帯電話所有とネット依存傾向との関連(小学生) p<0.05

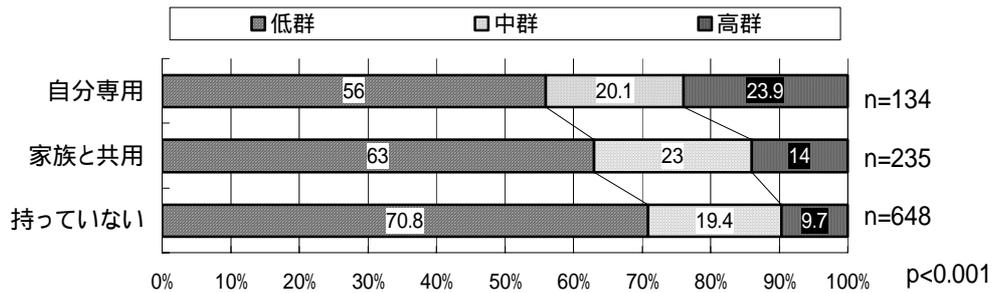


図2.2.2 携帯電話所有と子どもの変化・プラス面との関連(小学生)

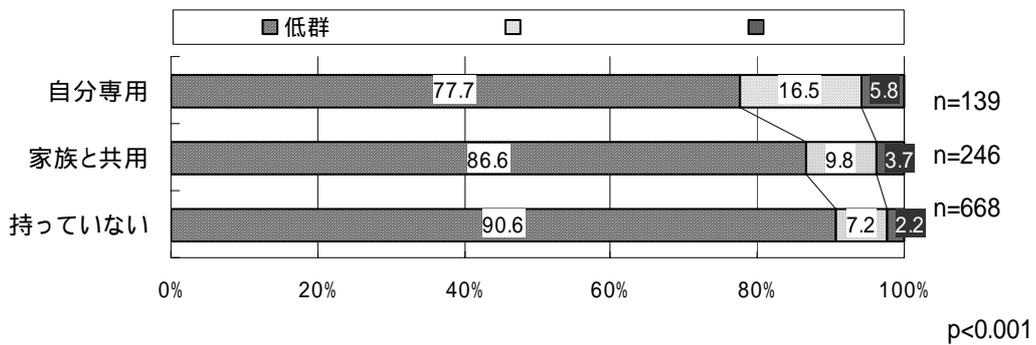


図2.2.3 携帯電話所有と子どもの変化・マイナス面との関連(小学生)

また、携帯電話利用頻度と「インターネット依存」傾向との関連においても、小学生にのみ有意な関連性が見られた。携帯電話の利用頻度が高くなるほど「インターネット依存」傾向及び、インターネット利用による変化が大きくなる傾向がある。

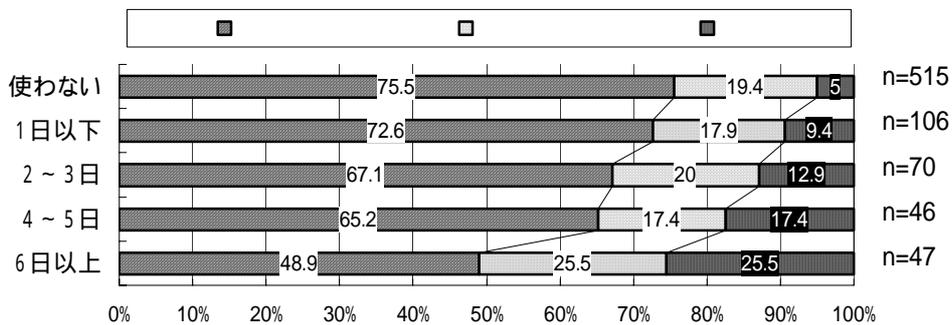


図2.2.4 携帯電話利用頻度とネット依存傾向との関連(小学生) p<0.001

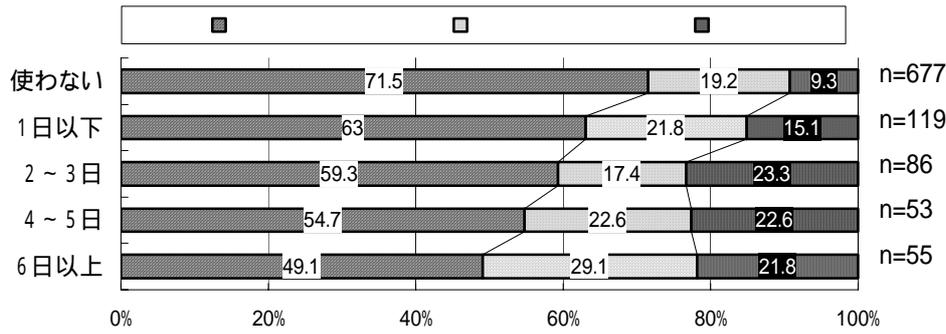


図2.2.5 携帯電話利用頻度と子どもの変化・プラス面との関連 (小学生)  $p < 0.001$

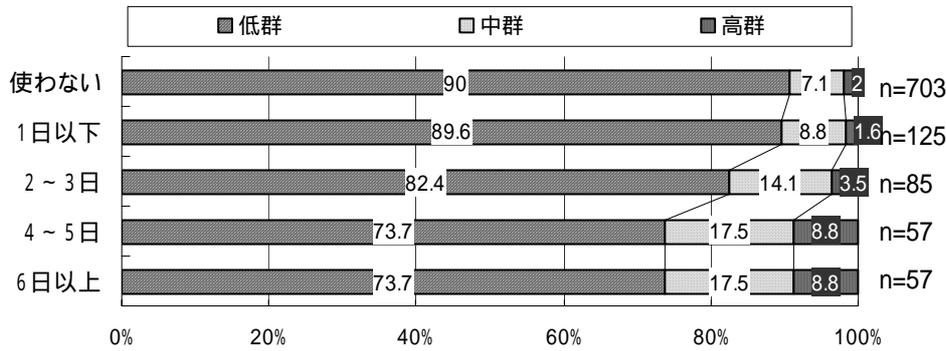


図2.2.6 携帯電話利用頻度と子どもの変化・マイナス面との関連 (小学生)  $p < 0.001$

中学生や高校生になると所有率が高くなり、所有していることが当たり前のように思われる携帯電話であるが、小学生においては所有率が低いことから分かるように「特別」なコミュニケーションツールである。おそらく、小学生にとってはインターネット（パソコン）も携帯電話も、所有率や利用頻度の観点からすると、同類の情報機器と位置付けることが出来るだろう。そのため、携帯電話の所有及び利用頻度と「インターネット依存」傾向との間に関連性が見られたのではないかと考えられる。それに対し、中学生及び高校生にとっては、パソコンの所有率やインターネットの利用頻度と携帯電話の所有率及び利用頻度は明らかに違いが見られる。このことが、携帯電話の所有、利用頻度と「インターネット依存」傾向との関連性の分析結果に、小学生と中・高校生との差が見られた原因ではないかと思われる。

### 3. 「インターネット依存」傾向と子どもの変化との関連

「インターネット依存」傾向と、インターネット利用による子どもの変化との関連についてクロス分析を行った。その結果を表3.1、図3.1～3.6に示した。

小学生、中学生、高校生ともに、「インターネット依存」傾向とプラス面の変化の間には有意な差が見られた。いずれも、「インターネット依存」傾向が高いほど、プラス面とマイナス面の変化の両方が大きくなる傾向にあった。つまり、インターネットの利用は利用者に良くも悪くも影響を与えることがわかる。それゆえに良い影響は最大限に、悪い影響は最小限になるようにインターネットをうまく利用していくことが必要である。

表3.1 「インターネット依存」傾向と子どもの変化との関連

(クロス分析の<sup>2</sup>検定)

	小学生	中学生	高校生
ネット依存 × 子どもの変化・プラス面	***	***	***
× 子どもの変化・マイナス面	***	***	***

\*\*\*p<0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05

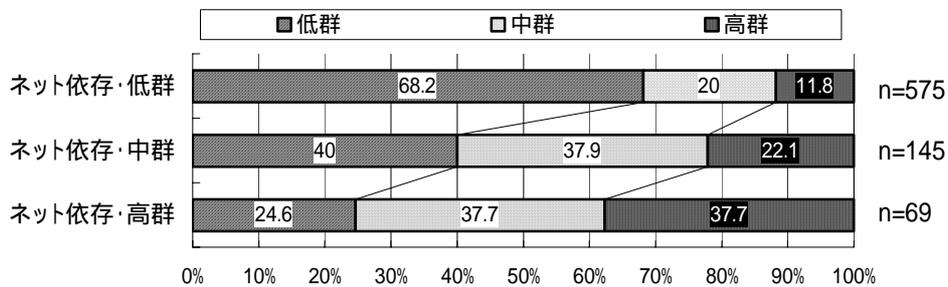


図3.1 ネット依存傾向と子どもの変化・プラス面との関連(小学生) p<0.001

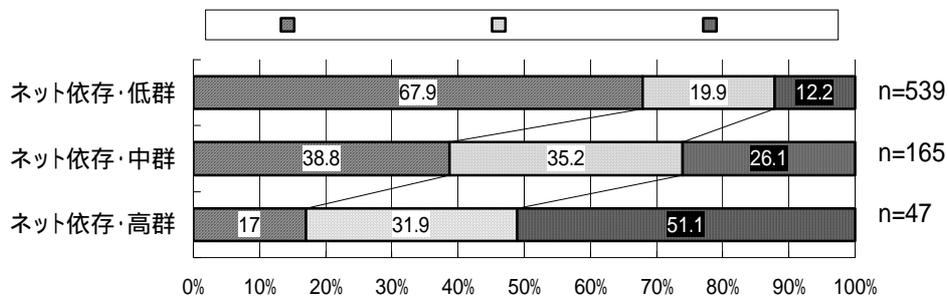
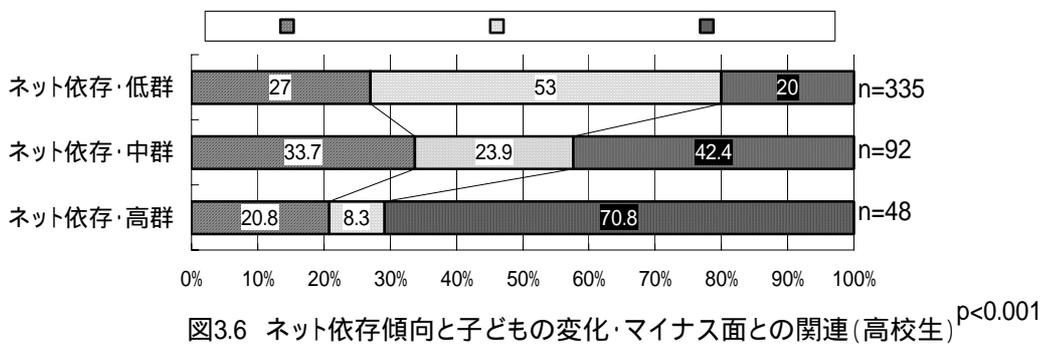
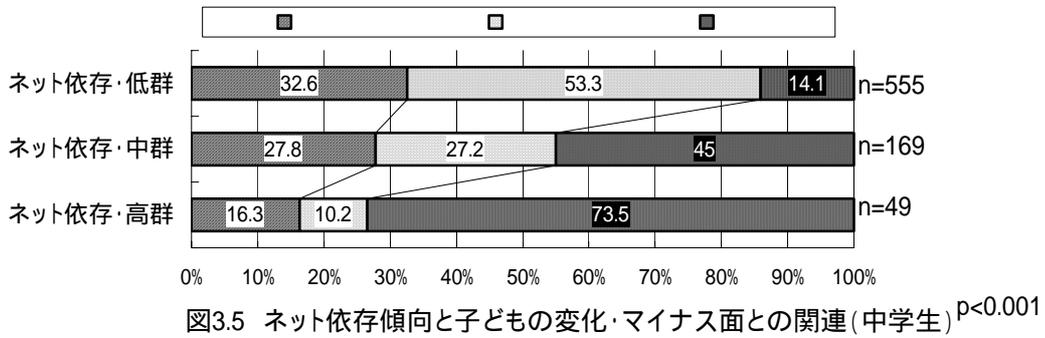
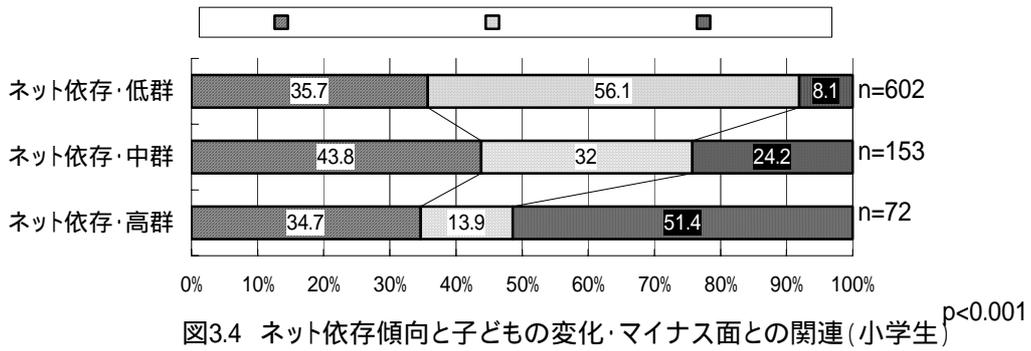
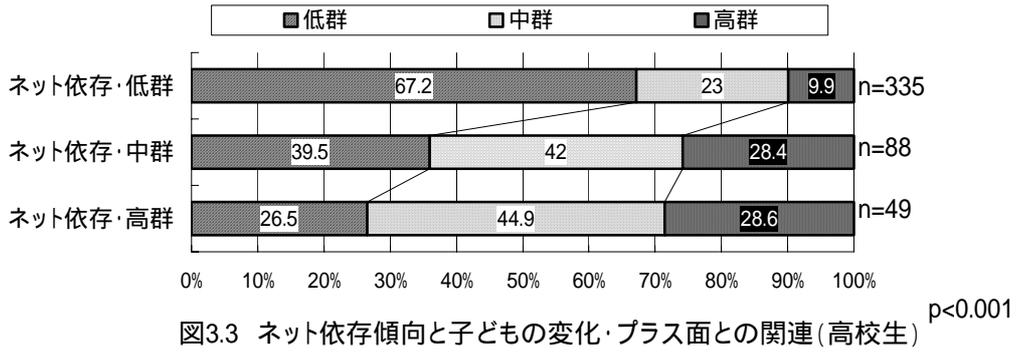


図3.2 ネット依存傾向と子どもの変化・プラス面との関連(中学生) p<0.001



さらに、「インターネット依存」傾向、インターネット利用によるプラス面の变化、マイナス面の变化それぞれについて相関係数を求めた。その結果を表3.2に示す。「インターネット依存」傾向はプラス面、マイナス面両方の变化と相関を示している。また、プラス面とマイナス面との間も相関を示していることが分かる。ここで、プラス面の变化としては主に、友達関係や家族関係に良い変化が現れたことや生活の楽しみが増えたなど、人間関係に良い変化が現れたことが挙げられていたことに対し、マイナス面の变化としては健康面に悪い変化が現れたことが挙げられていたことを加味して考察をすると以下ようになる。

「インターネット依存」傾向の強いものほど、インターネット利用によって、プラス面、マイナス面の両方に变化が現れることが分かる。インターネット利用によって、人間関係や生活に楽しみが増えるというプラス面がある一方、睡眠時間の減少などの健康上のマイナス面があることは否定できない。インターネットを利用する以上、健康上のマイナス面はある程度我慢しなければならないとも考えられるが、マイナス面を最小限にとどめるための指導が必要であると思われる。

表3.2 相関係数 (Pearson)

		ネット依存傾向	変化・プラス面	変化・マイナス面
小学生	ネット依存傾向		0.303(***)	0.167(***)
	変化・プラス面	0.303(***)		0.112(***)
	変化・マイナス面	0.167(***)	0.112(***)	
中学生	ネット依存傾向		0.338(***)	0.297(***)
	変化・プラス面	0.338(***)		0.253(***)
	変化・マイナス面	0.297(***)	0.253(***)	
高校生	ネット依存傾向		0.329(***)	0.218(***)
	変化・プラス面	0.329(***)		0.285(***)
	変化・マイナス面	0.218(***)	0.285(***)	

#### 4. 情報モラル教育と「インターネット依存」傾向との関連

ここでは、情報モラル教育と「インターネット依存」傾向との関連性を分析してゆくこととする。情報モラル教育に関する質問は以下の通りである。

- 6 1: コンピューターやインターネット(メールを含む)を使用する際のマナーなどを誰から習いましたか？  
(1つに )
1. 親 2. 学校の先生 3. 学校などの友人 4. 学校以外の塾など 5. インターネット上の人から  
6. 本などで読んだ 7. 習ったことがない
- 6 2: 習った内容は理解できましたか？(1つに )
1. ほとんど理解できた 2. すでに知っていた 3. 説明が不十分で理解できなかった  
4. 内容が難しくて理解できなかった 5. その他

問 6 1 に関しては『3.. 学校などの友人』『4. 学校以外の塾など』『5. インターネット上の人から』『6. 本などで読んだ』を度数が小さかったため、クロス分析の際にはひとまとめにして『その他から習った』として分析を行った。

以下、クロス分析、コレスポネンス分析の結果を中心に情報モラル教育と「インターネット依存」傾向について見ていくこととする。

##### 1) 情報モラル教育の教え手と理解度との関連

まず、情報モラル教育の教え手と理解度との関連について、コレスポネンス分析を行った。その結果を図4.1.1~図4.1.3に示した。コレスポネンス分析では、取り上げた2つの質問を二次元空間にまとめているもので、似ているカテゴリーはより近く、似ていないカテゴリーはより遠く配置されるように軸をとっている。図を読み取る際には、似ているカテゴリーは近くにあると思えばよい。

この結果、小学生、高校生においては、先生から情報モラル教育を受けた者は、「その内容は説明不十分で理解できなかった」と思っており、これは今後の課題であると言えるだろう。教育の内容を理解できなかった原因としては、教育内容が高度な内容であったか、あるいは教育の方法が良くなかったかという二点が挙げられ、この両面から今後の情報モラル教育を考えていく必要があるだろう。

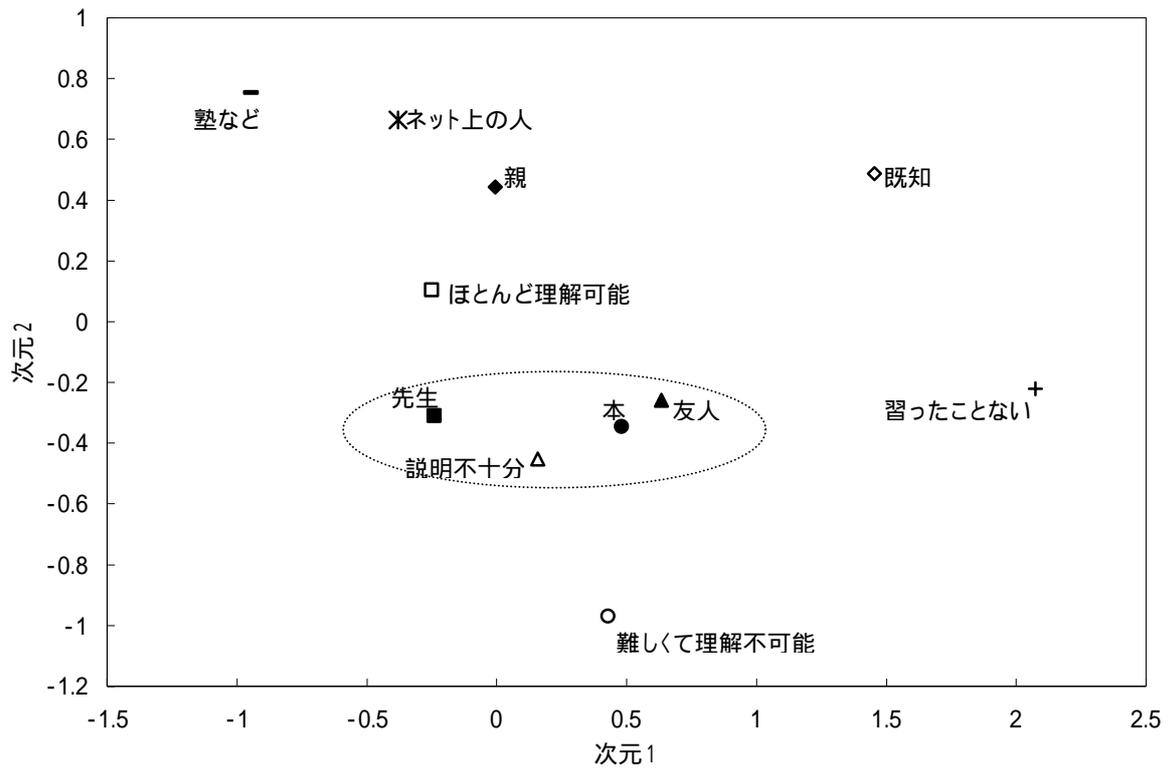


図4.1.1 情報モラル教育の教え手とその理解度との関連(小学生)

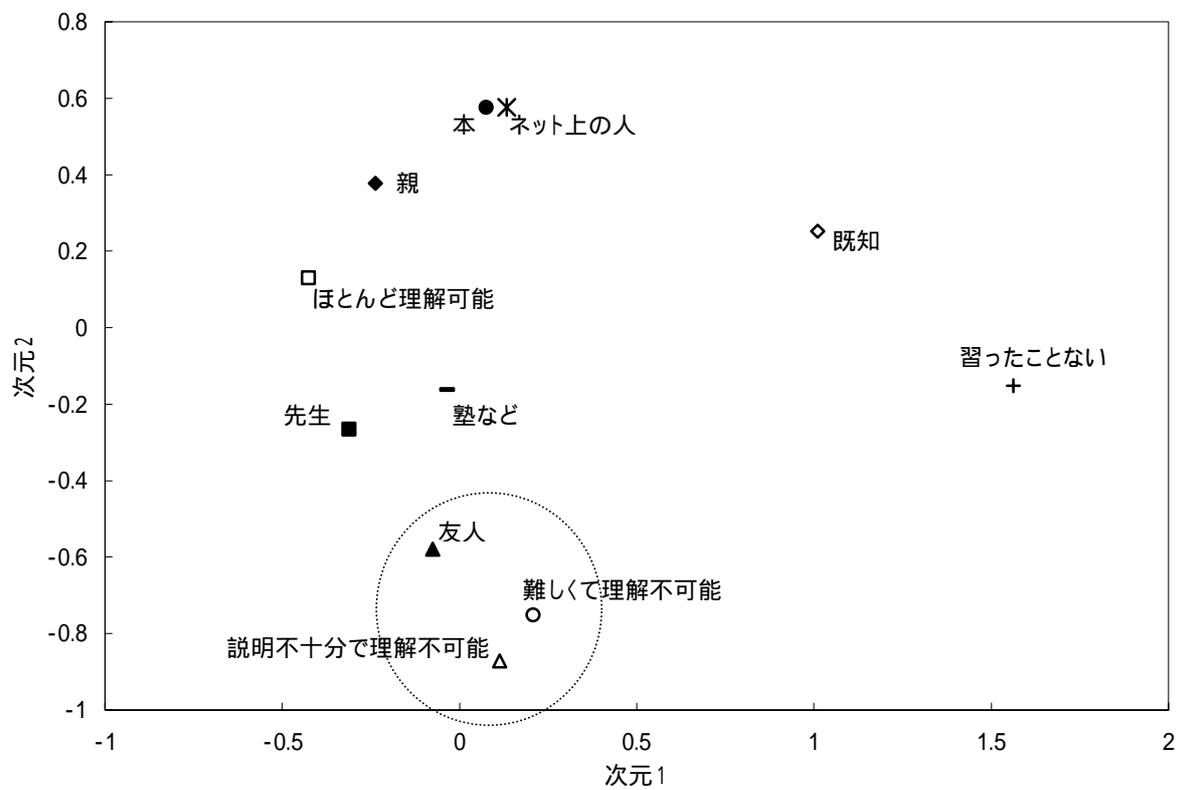


図4.1.2 情報モラル教育の教え手とその理解度との関連(中学生)

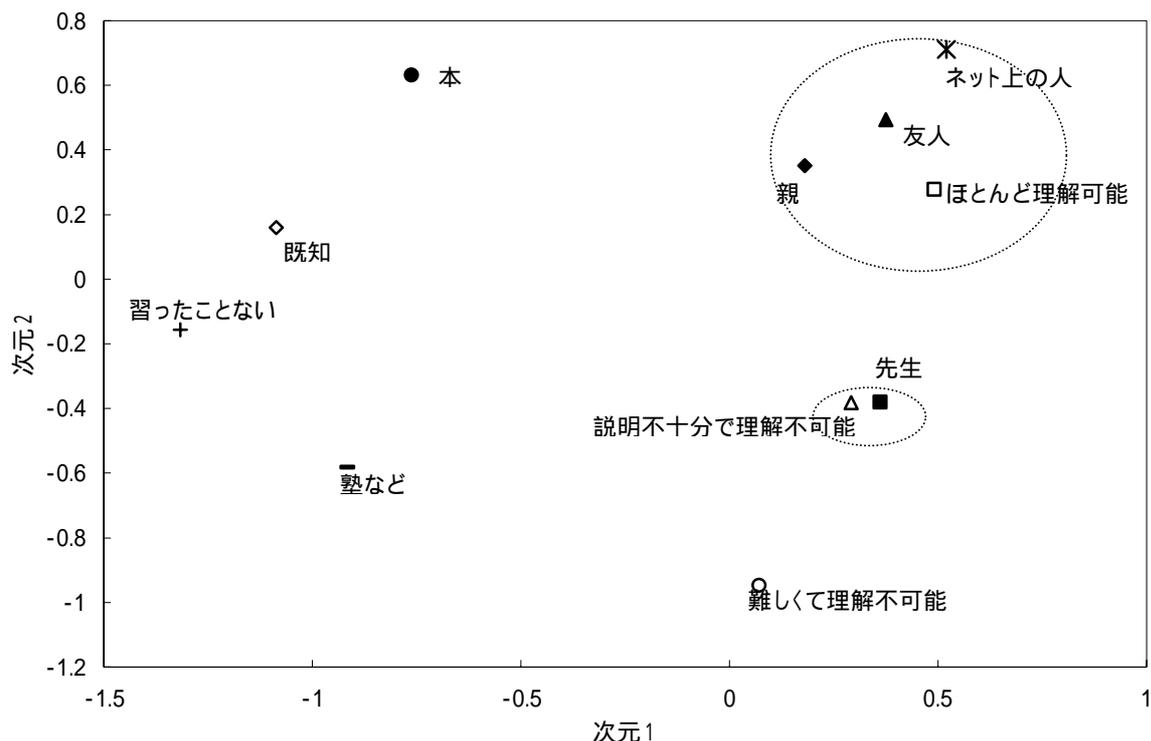


図4.1.3 情報モラル教育の教え手とその理解度との関連(高校生)

## 2) 教え手と子どもの変化との関連

情報モラル教育の教え手とインターネット利用による子どもの変化(プラス面)についてクロス分析を行った。その結果を表4.2.1、図4.2.1～図4.2.3に示した。

情報モラル教育を受けた経験のある方が、プラス面の変化が多くなる傾向があり、さらに教え手によって、プラス面の変化の多さに有意な差が見られることが分かった。さらに考察を深めるために、コレスポネンシ分析を行った。その結果を図4.2.4～図4.2.6に示した。

表4.2.1 教え手と子どもの変化との関連

(クロス分析の<sup>2</sup>検定)

	小学生	中学生	高校生
教え手 × 子どもの変化・プラス面	***	***	***
× 子どもの変化・マイナス面	*	***	**

\*\*\* $p < 0.001$ , \*\* $p < 0.01$ , \* $p < 0.05$

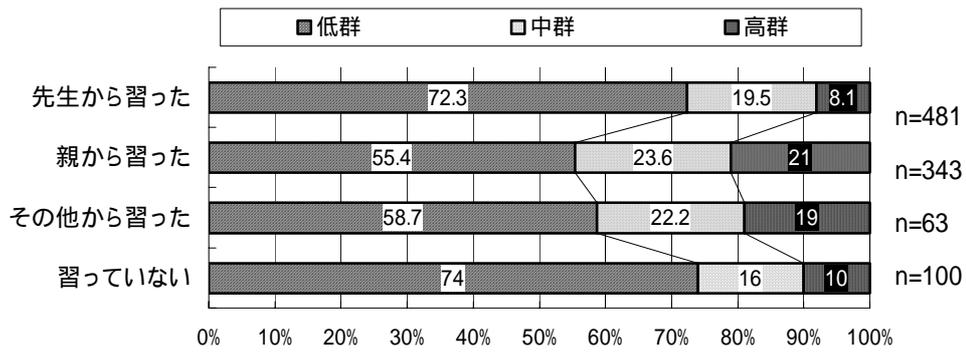


図4.2.1 情報モラル教育の教え手と子どもの変化・プラス面との関連(小学生)

p<0.001

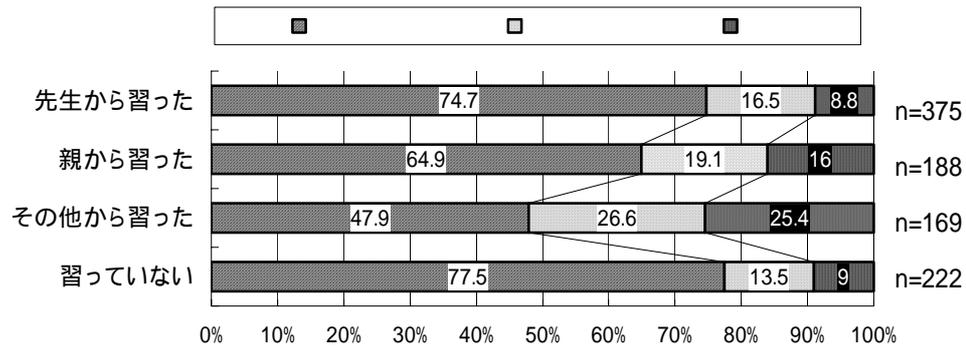


図4.2.2 情報モラル教育の教え手と子どもの変化・プラス面との関連(中学生)

p<0.001

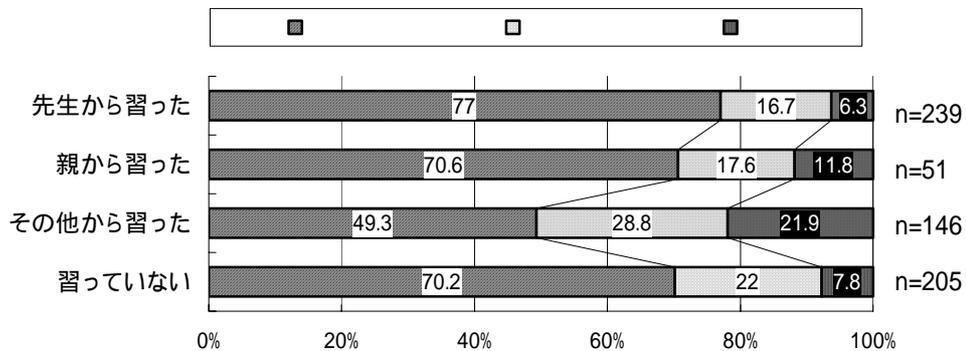


図4.2.3 情報モラル教育の教え手と子どもの変化・プラス面との関連(高校生)

p<0.001

コレスポンデンス分析の結果より、情報モラル教育を先生から受けた者はプラス面の変化が少ない傾向にあることがわかる。また、習っていない者もプラス面の変化が少ない。

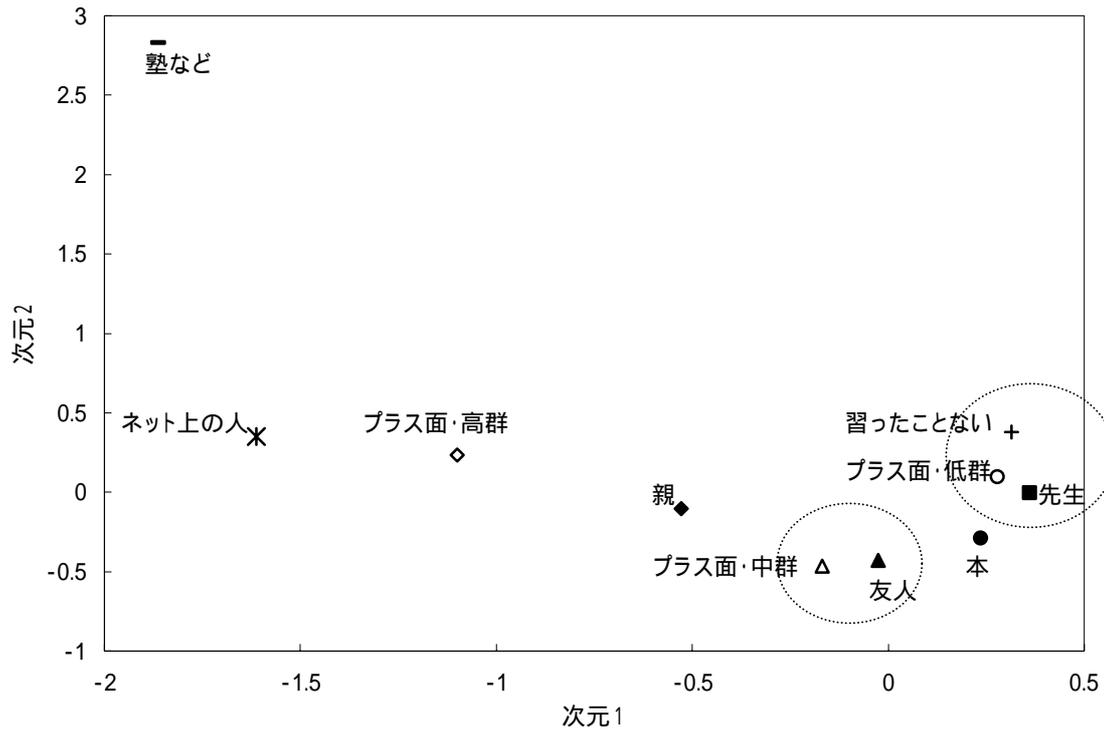


図4.2.4 情報モラル教育の教え手と子どもの変化・プラス面との関連 (小学生)

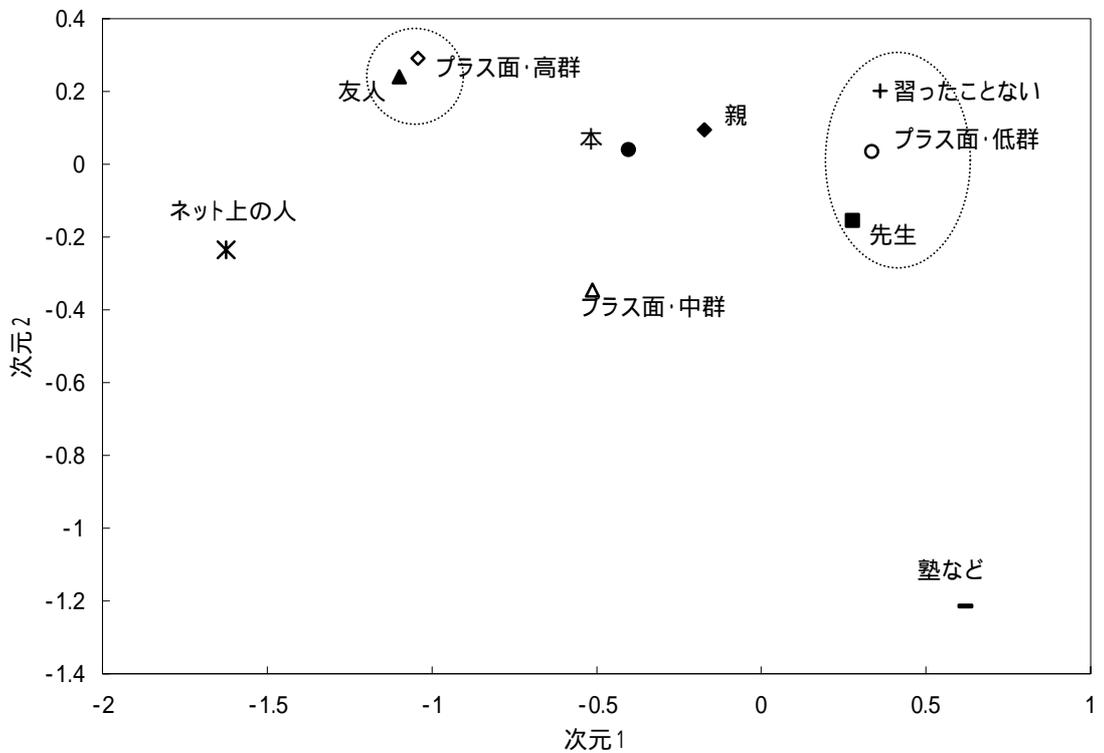


図4.2.5 情報倫理教育の教え手と子どもの変化・プラス面との関連 (中学生)

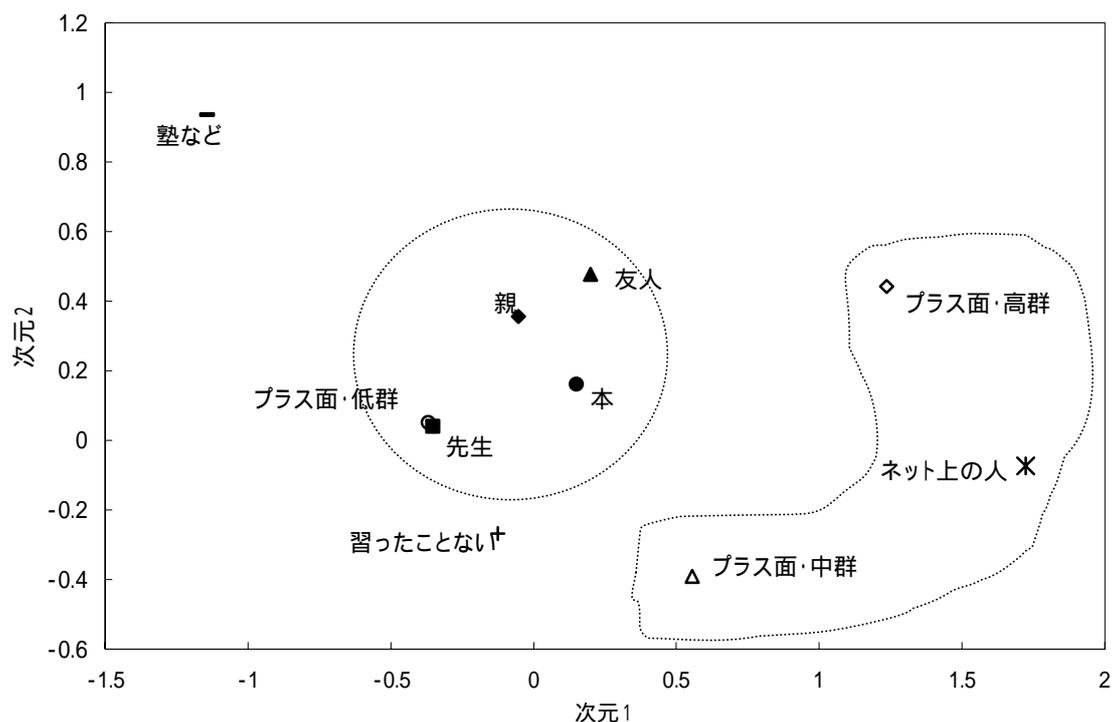


図4.2.6 情報倫理教育の教え手と子どもの変化・プラス面との関連  
(高校生)

次に、情報モラル教育の教え手とインターネット利用による子どもの変化（マイナス面）との関連についてクロス分析（結果は前出の表4.2.1を参照）結果を図4.2.7～図4.2.9に示す。先生や親以外から情報モラル教育を受けたものは、インターネット利用によるマイナス面の変化が大きくなる傾向がある。おそらく学校の先生からはインターネット利用によるデメリットについても習っているなど、多角的な教育を受けていたのではないかと思われる。情報モラル教育として、インターネット利用によるメリット、デメリット、両面をきちんと教育する必要性が明らかとなった。

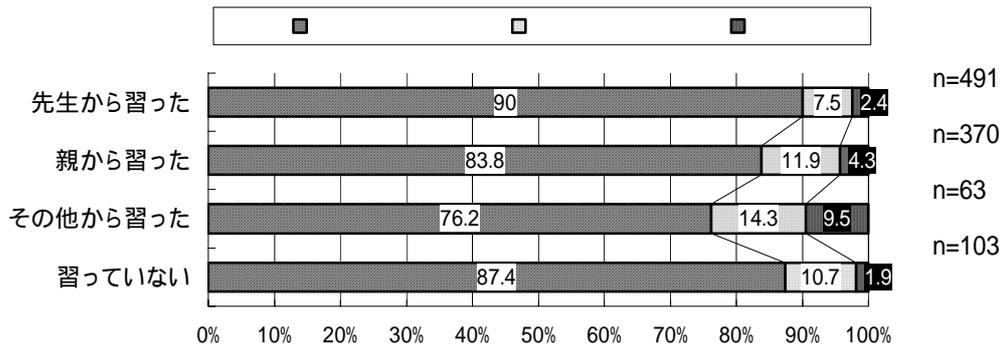


図4.2.7 情報モラル教育の教え手と  
子どもの変化・マイナス面との関連(小学生)

p<0.05

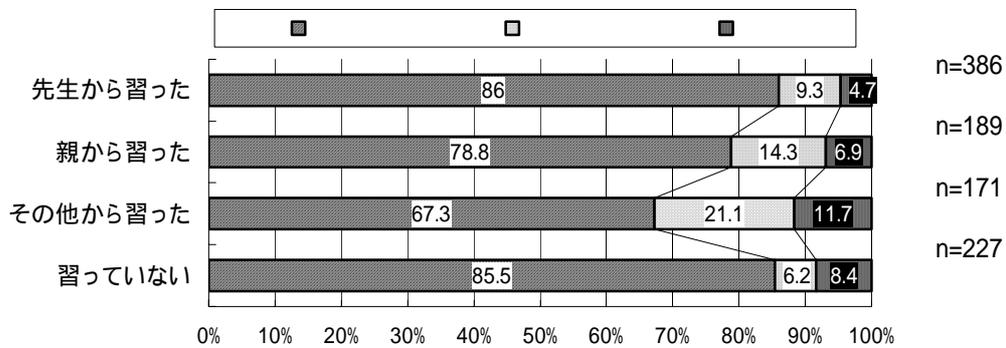


図4.2.8 情報モラル教育の教え手と  
子どもの変化・マイナス面との関連(中学生)

p<0.001

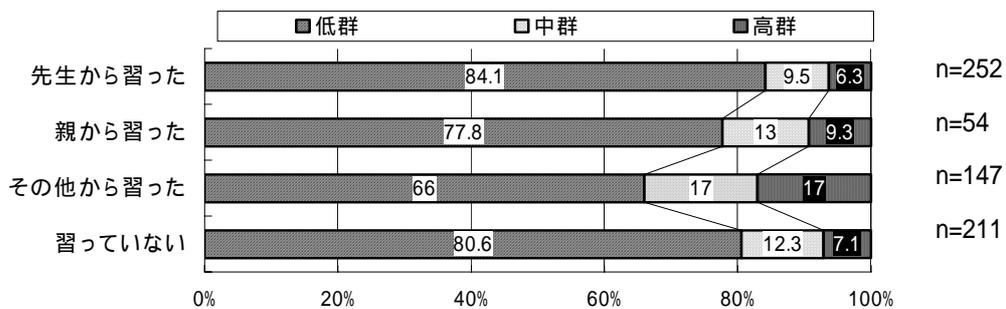


図4.2.9 情報モラル教育の教え手と  
子どもの変化・マイナス面との関連(高校生)

p<0.01

### 3) 理解度と子どもの変化との関連

情報モラル教育と、インターネット利用による子どもの変化についてクロス分析を行った。その結果を表4.3.1、図4.3.1～図4.3.5に示した。小学生、中学生、高校生、いずれにおいても情報モラル教育の理解度が高いほど、プラス面の変化が大きくなる傾向にあることが分かった。

表4.3.1 理解度と子どもの変化との関連

(クロス分析の<sup>2</sup>検定)

	小学生	中学生	高校生
理解度 × 子どもの変化・プラス面	***	**	***
× 子どもの変化・マイナス面		*	*

\*\*\*p<0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05

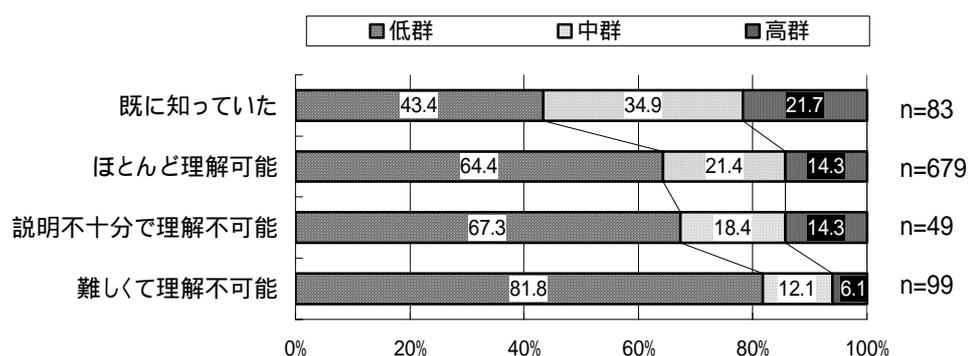


図4.3.1 情報モラル教育の理解度と子どもの変化・プラス面との関連(小学生) p<0.001

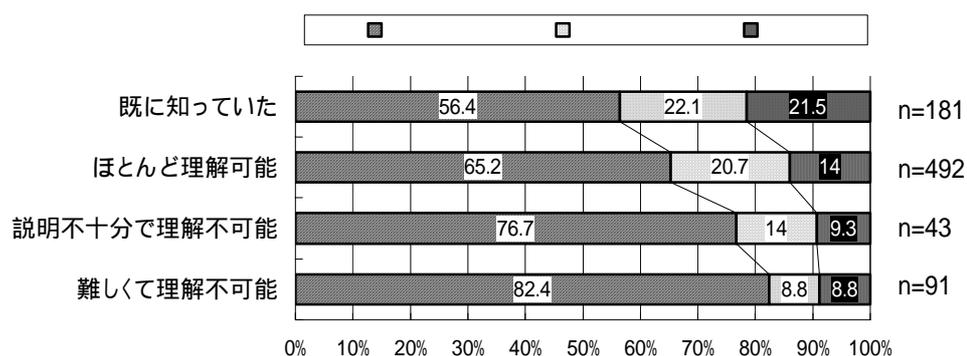


図4.3.2 情報モラル教育の理解度と子どもの変化・プラス面との関連(中学生) p<0.01

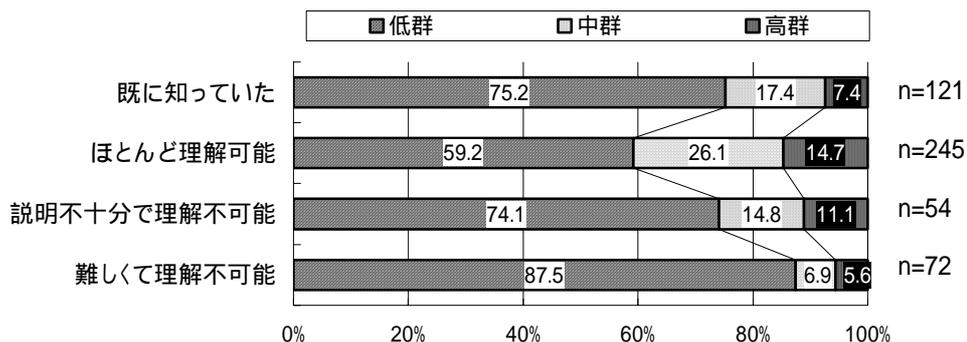


図4.3.3 情報モラル教育の理解度と子どもの変化・プラス面との関連(高校生) p<0.001

マイナス面も、プラス面と同様の傾向が見られた。理解度が高い者ほど、マイナス面の変化が多くなる傾向にあった。このことから、インターネット利用には、プラス面とマイナス面の両方が伴うものであることが推測出来る。

#### 4) 教え手と「インターネット依存」傾向との関連

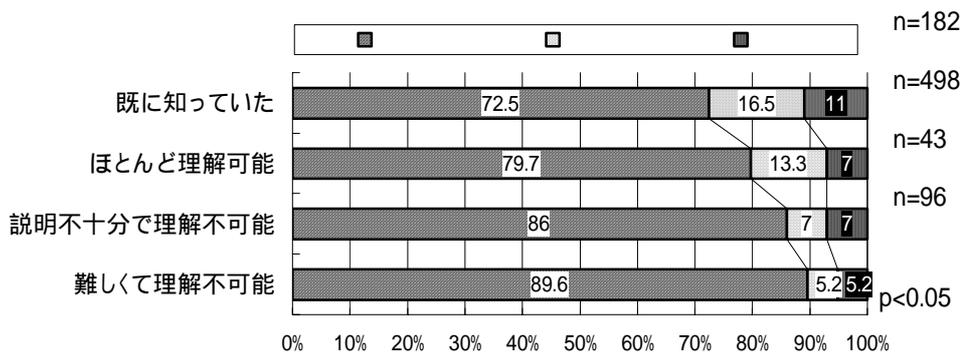


図4.3.4 情報モラル教育の理解度と子どもの変化・マイナス面との関連(中学生) p<0.05

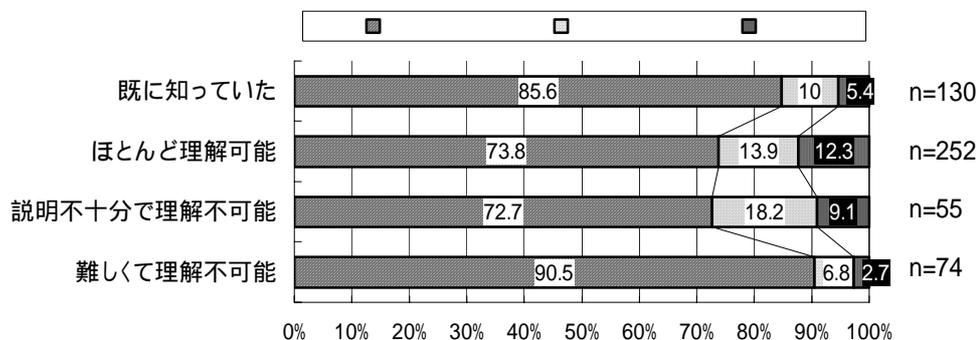


図4.3.5 情報モラル教育の理解度と子どもの変化・マイナス面との関連(高校生) p<0.05

情報モラル教育の教え手と「インターネット依存」傾向との関連についてクロス分析を行った。その結果を表4.4.1、図4.4.1～図4.4.3に示した。

小学生、中学生、高校生いずれも同様の傾向が見られた。情報モラル教育を学校の先生から受けた経験を持つ者は「インターネット依存」傾向が低い傾向にあることが明らかとなった。「インターネット依存」の防止には学校の先生による教育が有用であると考えられる。一口に情報モラル教育といっても、その内容は様々であり、その難易度によって理解度には差が生じるだろう。前出の結果より、学校の先生による情報モラル教育の理解度は必ずしも高くないと推測できるが、他の教え手と比較して、レベルの高い教育内容なのではないかと考えられ、そのレベルの高さゆえ「インターネット依存」の防止に有用であるのではないかと考えられる。

表4.4.1 教え手と「インターネット依存」傾向との関連

(クロス分析の<sup>2</sup>検定)

	小学生	中学生	高校生
教え手 × ネット依存	***	***	***

\*\*\*p<0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05

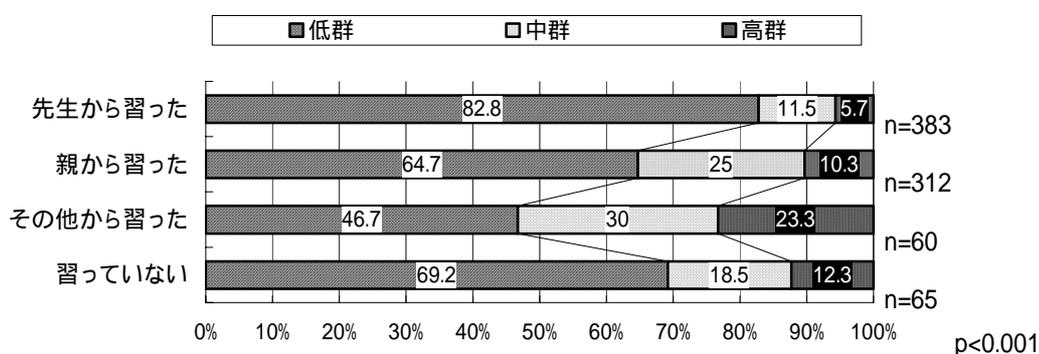


図4.4.1 情報モラル教育の教え手とネット依存傾向との関連(小学生)

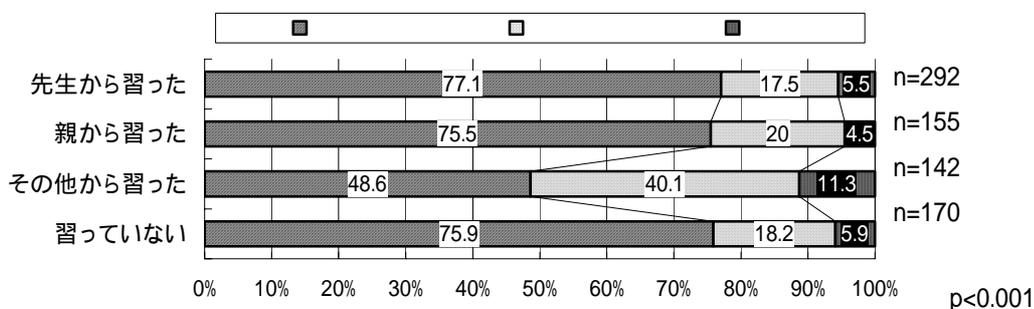


図4.4.2 情報モラル教育の教え手とネット依存傾向との関連(中学生)

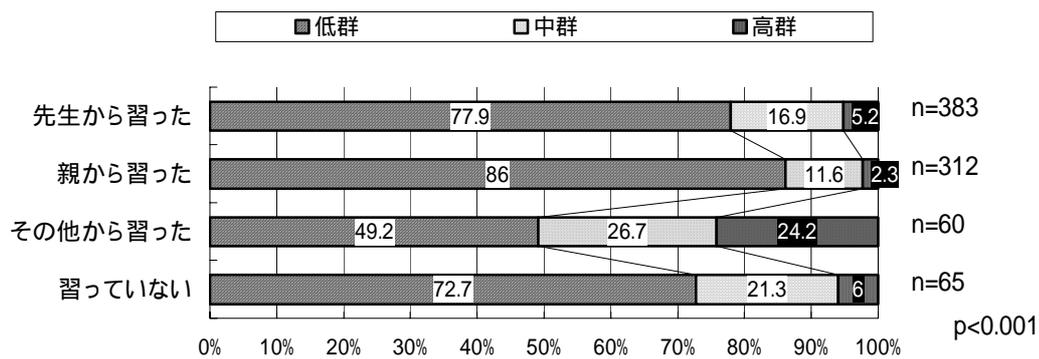


図4.4.3 情報モラル教育の教え手とネット依存傾向との関連(高校生)

### 5) 理解度と「インターネット依存」との関連

情報モラル教育の理解度と「インターネット依存」傾向との関連についてクロス分析を行った。その結果を表4.5.1、図4.5.1～図4.5.3に示した。

小学生、中学生についてこれらの間に有意な差が見られた。情報モラル教育を受ける前からすでに知識を持っていた者は「インターネット依存」傾向が高かった。これは子どもに「インターネット依存」傾向が見られるほどにインターネットを利用したあとで、情報モラル教育がなされたものであろうと考えられる。つまり、情報モラル教育が後手に回ったのであろうと推測できる。これは、大人が情報モラル教育を行うよりも先に、子どもたちにインターネットを利用できる環境を与えてしまった結果であろう。この結果については、親や学校の教師をはじめとして大人たちが反省すべきであり、この結果を踏まえたうえでこれからの情報モラル教育のあり方を早急に考えなければならないだろう。

表4.5.1 理解度と「インターネット依存」傾向との関連

(クロス分析の<sup>2</sup>検定)

	小学生	中学生	高校生
理解度 × ネット依存	***	**	***

\*\*\* $p<0.001$ , \*\* $p<0.01$ , \* $p<0.05$

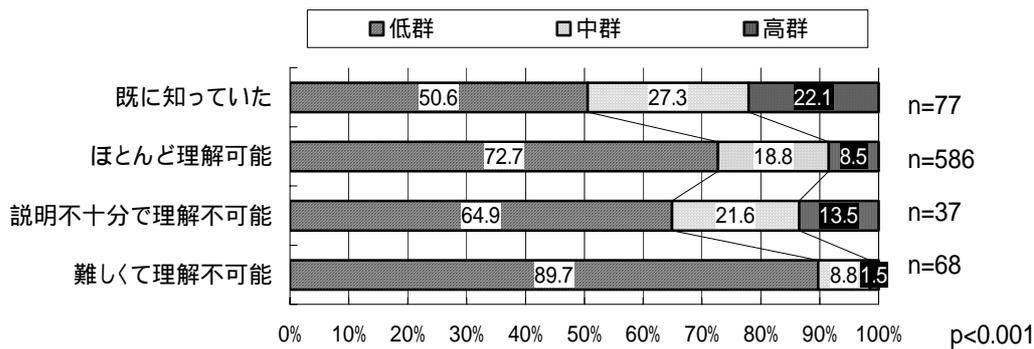


図4.5.1 情報モラル教育の理解度とネット依存傾向との関連 (小学生)

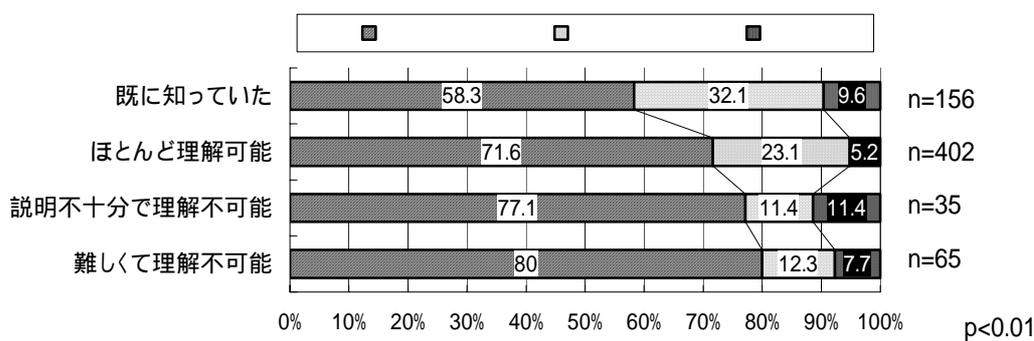


図4.5.2 情報モラル教育の理解度とネット依存傾向との関連 (中学生)

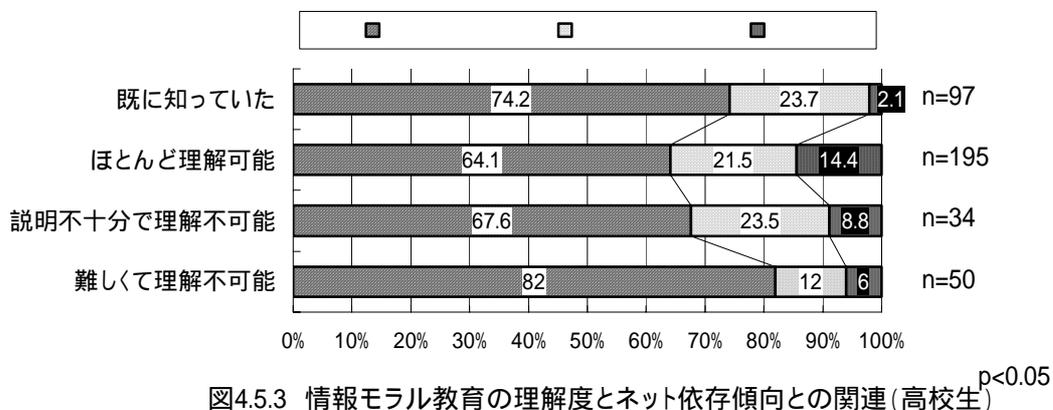


図4.5.3 情報モラル教育の理解度とネット依存傾向との関連 (高校生)

また、情報モラル教育と「インターネット依存」傾向についてコレスポネンス分析を行った。その結果を図4.5.4～図4.5.6に図示した。

小学生においては、ほとんど理解が出来た者は「インターネット依存」傾向が低いことが読みとれる。また、中学生においても、既知に知っていたり、ほとんど理解できたという、情報モラル教育の知識が身に付いているものは「インターネット依存」傾向が低くなる傾向がある。出来るだけ早く、発達段階に応じた情報モラル教育が重要であると考えられる。

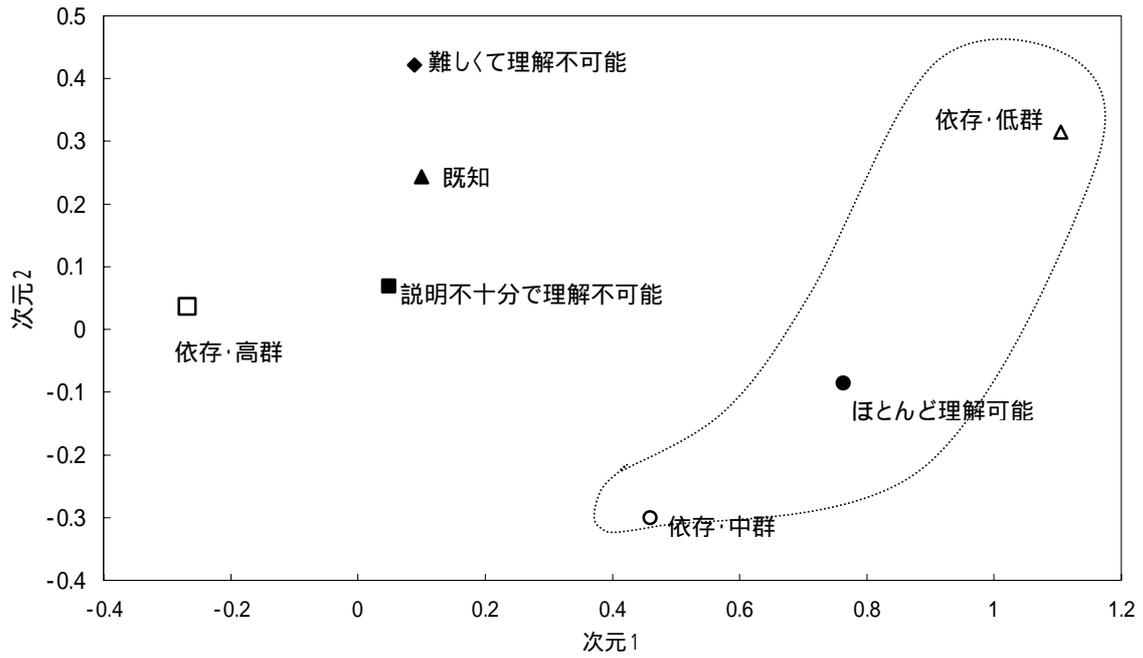


図4.5.4 情報モラル教育の理解度とインターネット依存傾向との関連 (小学生)

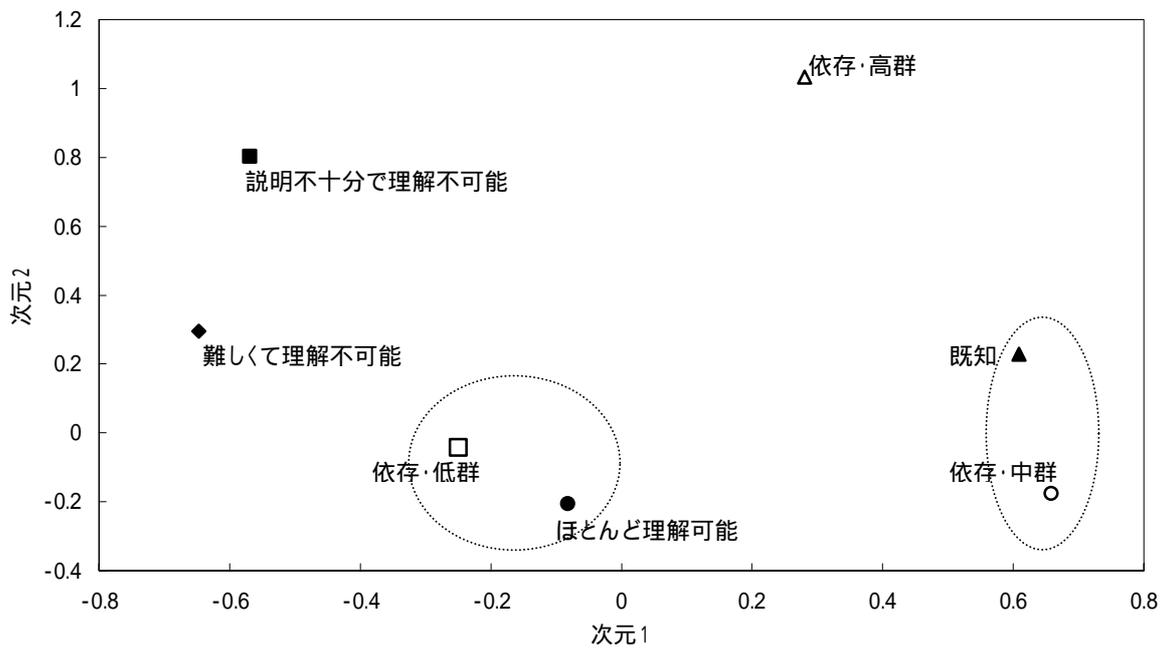


図4.5.5 情報モラル教育の理解度とインターネット依存傾向との関連 (中学生)

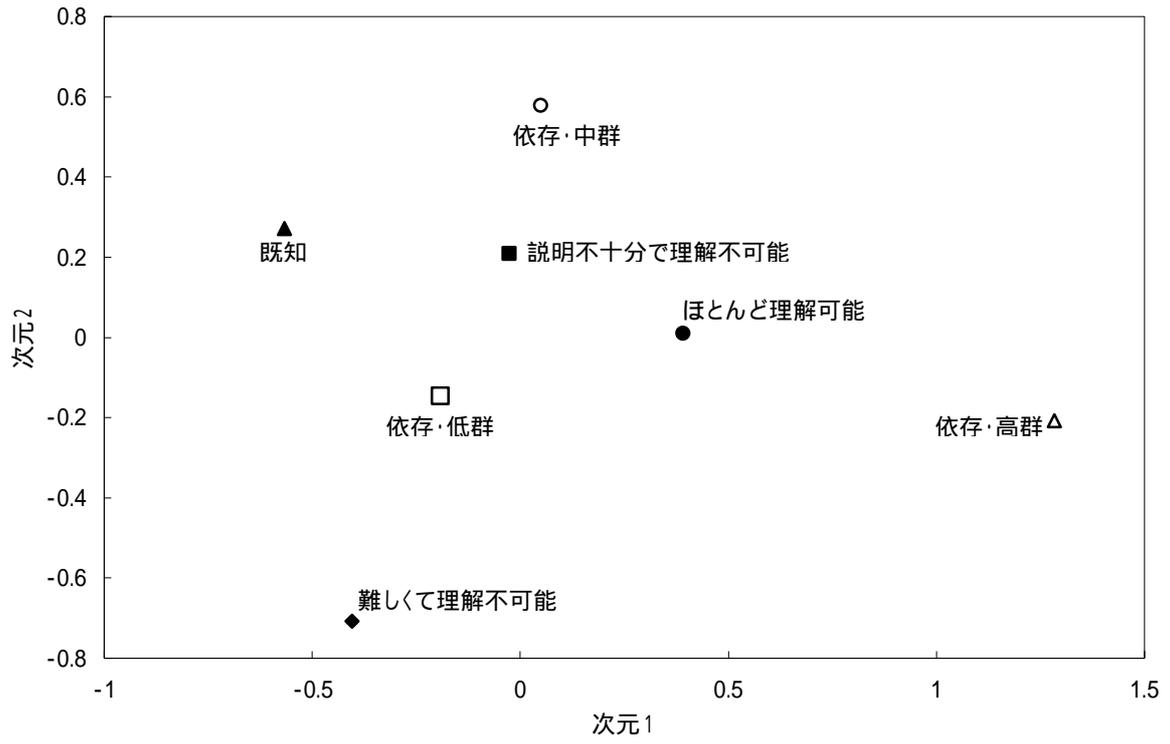


図4.5.6 情報モラル教育の理解度とインターネット依存傾向との関連 (高校生)

## 5. 共分散構造分析による本調査の分析枠組みの検討

### 1) 個人所有とインターネット利用実態、「インターネット依存」との関連

個人所有、インターネット利用実態、「インターネット依存」傾向及び、インターネット利用による子どもの変化との関連性について、共分散構造分析を行った。そのモデル及び結果を、図5.1.1～図5.1.3に示した。図中の楕円形で示されている変数は潜在変数、四角で示されている変数は観測変数である。観測変数は、質問への回答であり直接測定されるものである。潜在変数はそれら観測変数の測定値の組み合わせで構成された概念を測る尺度としての変数である。変数間の矢印は関連性の方向性を、数値はその大きさを表している。この数値は-1～1の値を取り、絶対値が1に近づくほど関連性が強いということになる。

モデル内に用いた潜在変数と、それが関与する観測変数群に対応する質問項目は下に示すとおりである。

個人所有:2 1:あなたは次のものを持っていますか	
コンピューター所有	2 1 1:コンピューター 1.自分専用がある 2.家族と共用 3.ない
ゲーム機所有	2 1 2:ゲーム機 1.自分専用がある 2.家族と共用 3.ない
携帯電話所有	2 1 3:携帯電話・PHS 1.自分専用がある 2.家族と共用 3.ない
ネット利用実態	
メールに利用	3 5 1:コンピューターを使う時間のうち、どれくらいをメールの時間に使っていますか？
チャットに利用	3 6 1:コンピューターを使う時間のうち、どれくらいをチャットの時間に使っていますか？
ホームページ関係に利用	3 7 1:コンピューターを使う時間のうち、どれくらいをホームページの時間に使っていますか？ 1.0～20% 2.20～40% 3.40～60% 4.60～80% 5.80～100%
ネット時間	3 4:コンピューターを使う日は、何時間くらいインターネットを使いますか？ 1.4時間以上 2.3～4時間 3.2～3時間 4.1～2時間 5.1時間未満
ネット依存傾向	
つなぐ時間、家族より、友達より、注意、かくす、忘れる、腹が立つ、不安	
前出の問	4 1 1～4 1 8
子どもの変化・悪い面	前出の問 4 2 の選択肢の奇数番号の合計
子どもの変化・良い面	前出の問 4 2 の選択肢の偶数番号の合計

なお、図中のRMSEAというのはモデルの適合度の指数のひとつであり、この値が0.05以下であれば、そのモデルが適合していると見なすことが出来る。

まず、小学生では、個人所有がインターネット利用実態へ、さらにインターネット利用実態が「インターネット依存」傾向に与える影響の値が大きいことから、関連性が高いと結論付けられる。また、「インターネット依存」傾向から子どもの変化の良い面へも悪い面へも同程度の値を示していることから、良い面、悪い面の両方に「インターネット依存」傾向が影響を与えるものと推測できる。さらに「インターネット依存」傾向の他の観測変数との関連を見ると、「家族より（家族と一緒にいるよりインターネットにつないでいるほうが楽しいと感じる）」「忘れる（インターネットにつなぐことでふだんの生活のいやなことを忘れる）」「腹が立つ（インターネットにつなぐのをだれかにじゃまされるとひどく腹が立つことがある）」の値が高いことから、「インターネット依存」傾向が高くなるとこの3点が強く現れると考えられ、この3点の態度が子どもから感じ取れたならば、「インターネット依存」傾向が高いことの現れとして捉えることが出来る。

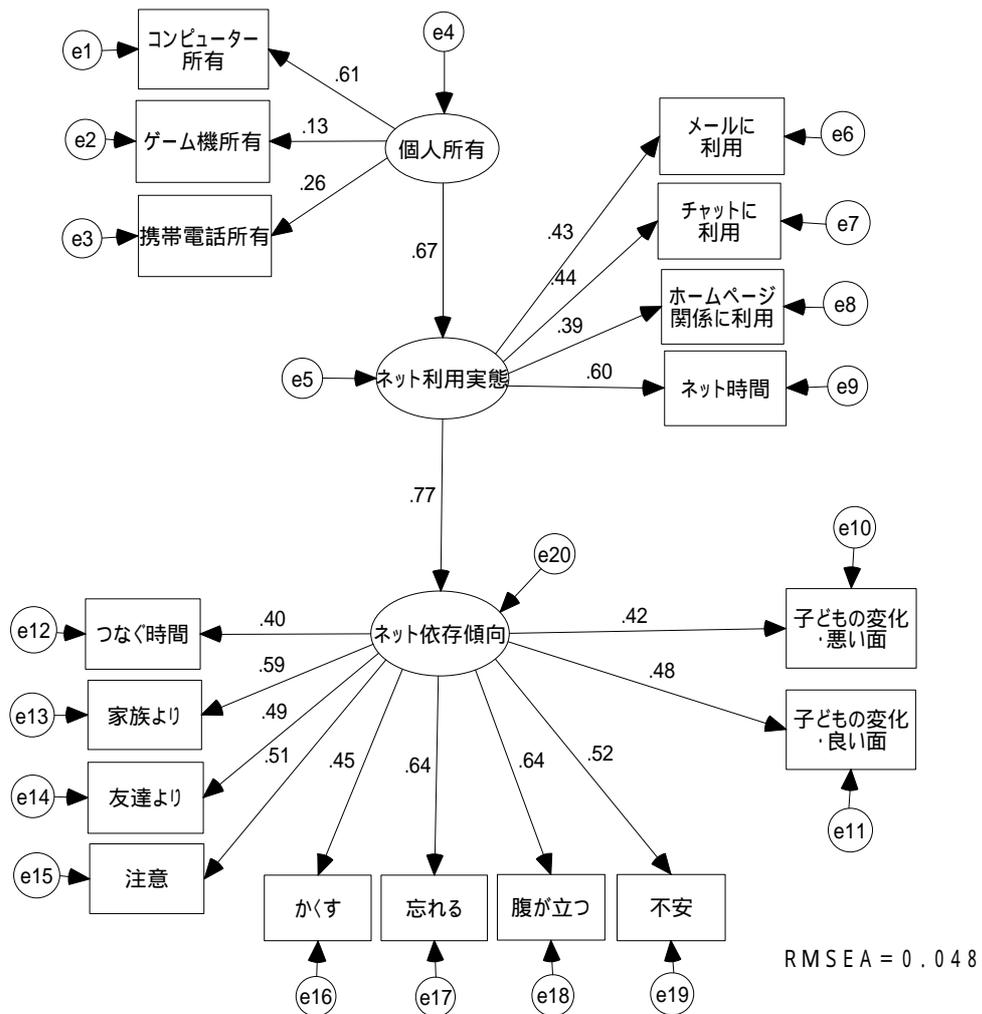


図5.1.1 小学生モデル

次に中学生を見ると、先ほどの小学生とほぼ同様の傾向がうかがえる。やはり、個人所有、インターネット利用実態、「インターネット依存」傾向との間には関連性が見られた。「インターネット依存」傾向を構成する際に強く影響を与える態度にも同様の傾向が見られた。

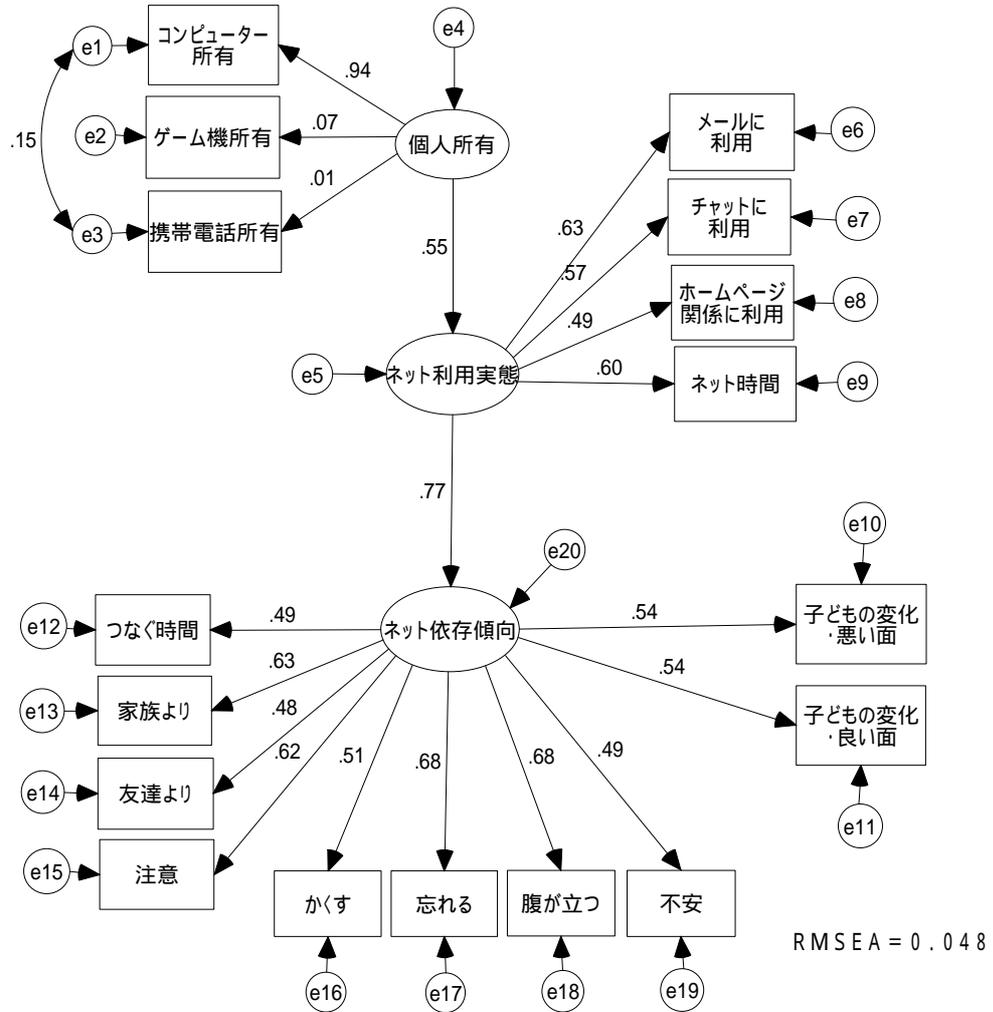


図 5.1.2 中学生モデル

高校生についてもほぼ同様の傾向が見られる。「インターネット依存」傾向から「腹が立つ」への値が小中学生に比べて高いこと、逆に「つなぐ時間(つなぐ時間が最初に思っていたより長くなることもある)」への値が低いことは着目すべき点であろう。インターネットへの接続時間は確かに「インターネット依存」傾向に有意な影響を与えているのだが、単に接続時間の長さのみが「インターネット依存」傾向の目安となるのではなく、邪魔をされると腹が立つ、日常のいやなことを忘れるなどといった、インターネットへ没頭している態度の表れが「インターネット依存」傾向のサインとして位置づけられる。インターネットへの接続、利用の頻度に併せて、インターネットの世界に没頭する態度や、現実世界よりも重要視しているような態度の有無をインターネットの利用態度の健全度を測る基準として検討する必要がある。

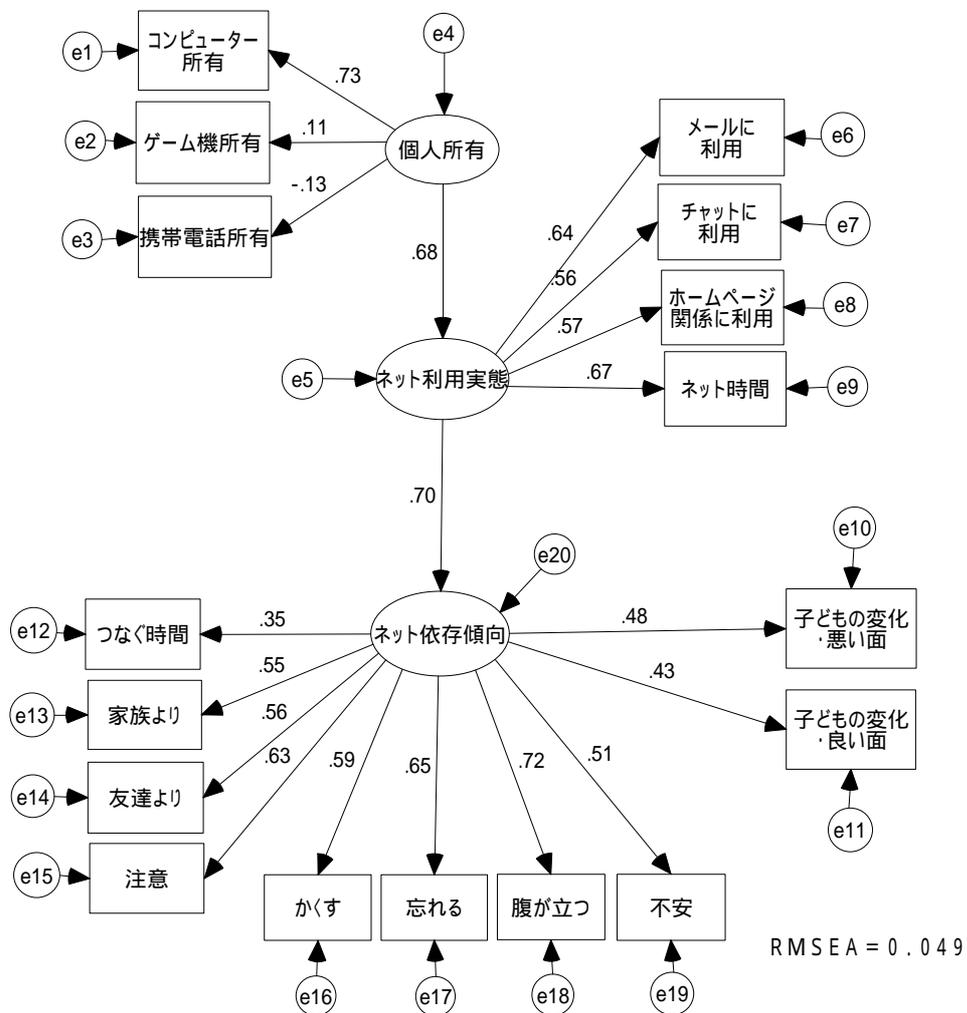


図5.1.3 高校生モデル

## 2) 分析枠組み全体の関連

さらに、本調査の分析枠組み全体の関連性について、共分散構造分析を行った。まず、モデル内の変数について、初出のものについて以下に質問項目を示しておく。

### 生活時間

**放課後** 1 4: 普段の放課後は主にどのように過ごしますか？

1. 学校で部活動
2. 学習塾に行く
3. 学校以外でスポーツ活動
4. 学校以外で文化活動
5. 家にいる
6. 友人や知り合いの家に行く
7. まちに出かける
8. その他

**帰宅時間** 1 4 1: その日は何時ごろに家に帰りますか？ 1. 午後5時まで 2. 午後6時まで 3. 午後7時まで 4. 午後8時まで 5. 午後9時まで 6. 午後10時まで 7. 午後11時まで 8. 午後11時よりも後

**就寝時間** 1 4 2: その日の夜は何時ごろに寝ますか？ 1. 午後8時まで 2. 午後9時まで 3. 午後10時まで 4. 午後11時まで 5. 午前0時まで 6. 午前0時よりも後

**夜間外出** 1 5: 夜間に一人で外出することがありますか 1. 友人の家に遊びに行くことがある 2. 友人と外で遊ぶことがある 3. その他の用事で外出することがある 4. 外出しない

小学生モデル(図5.2.1)を見ると、家庭・親子関係はネット利用実態にはほとんど影響を与えないが、ネット依存傾向に.23の効果を与えている。これは、家庭・親子関係が良好である(=潜在変数「家庭・親子」の数値が小さくなる)ほど、「インターネット依存」傾向が低くなる(=潜在変数「インターネット依存」傾向の数値が小さくなる)ことを示す。なお、因果の方向性としては、「インターネット依存」傾向が強くなった(接続時間が長くなり内容にのめり込むようになった)から、そのぶん現実社会の人間関係へ投入される関心・時間が減る、という方向性も考えられるが、ここでは、現実社会の人間関係への不満の補完機能をインターネットに求める子どもの姿をモデルのなかに位置づけている。

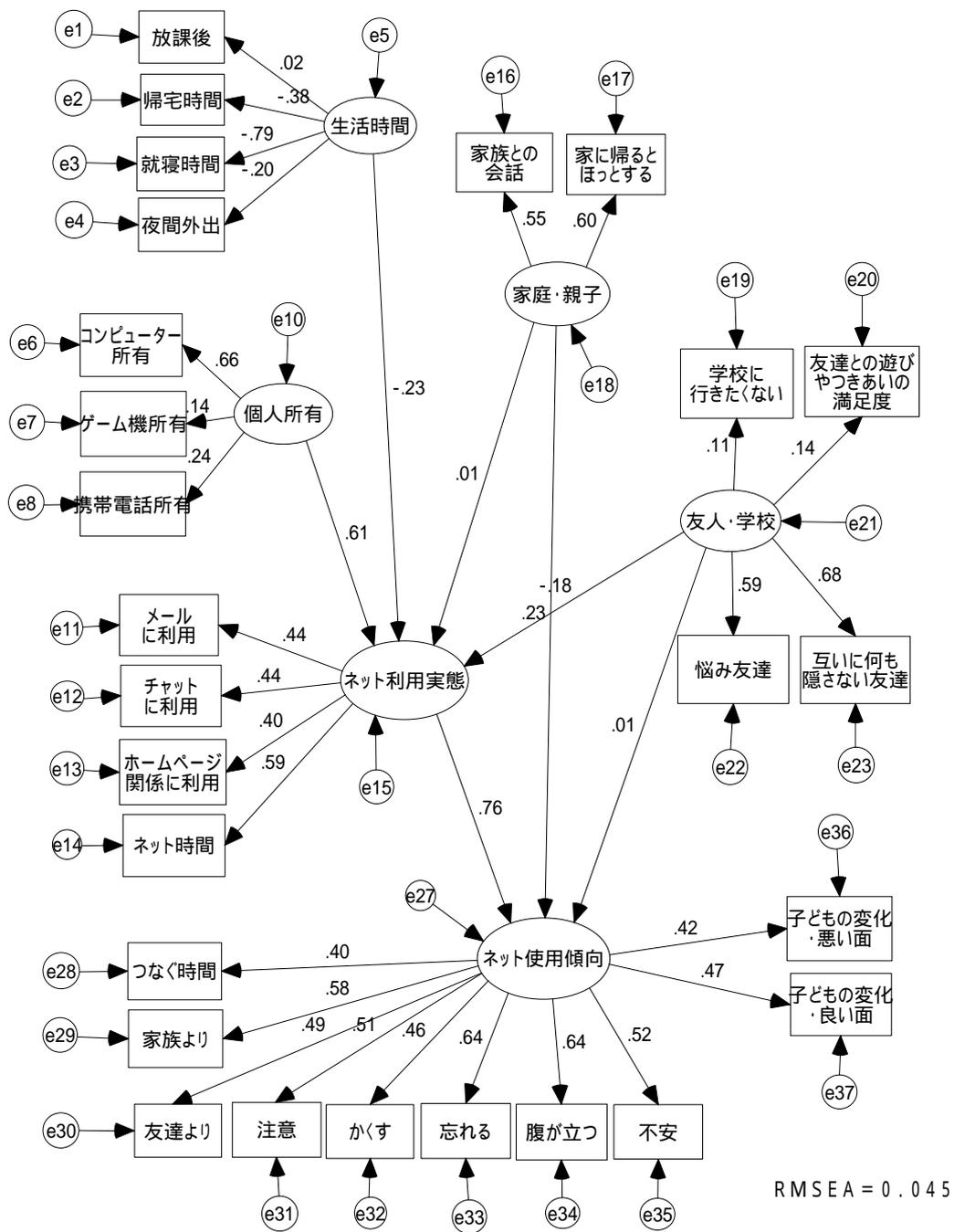


図5.2.1 小学生モデル

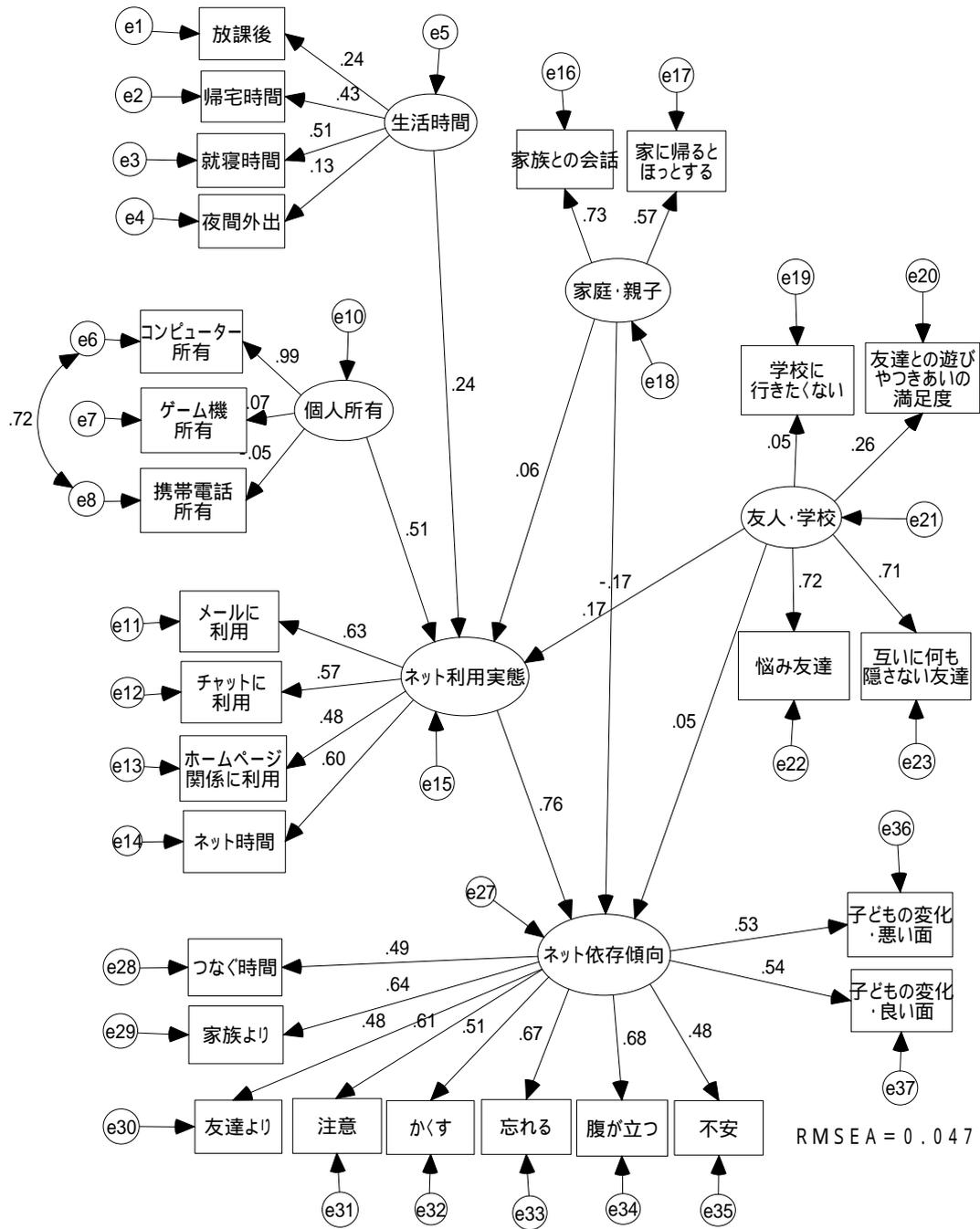
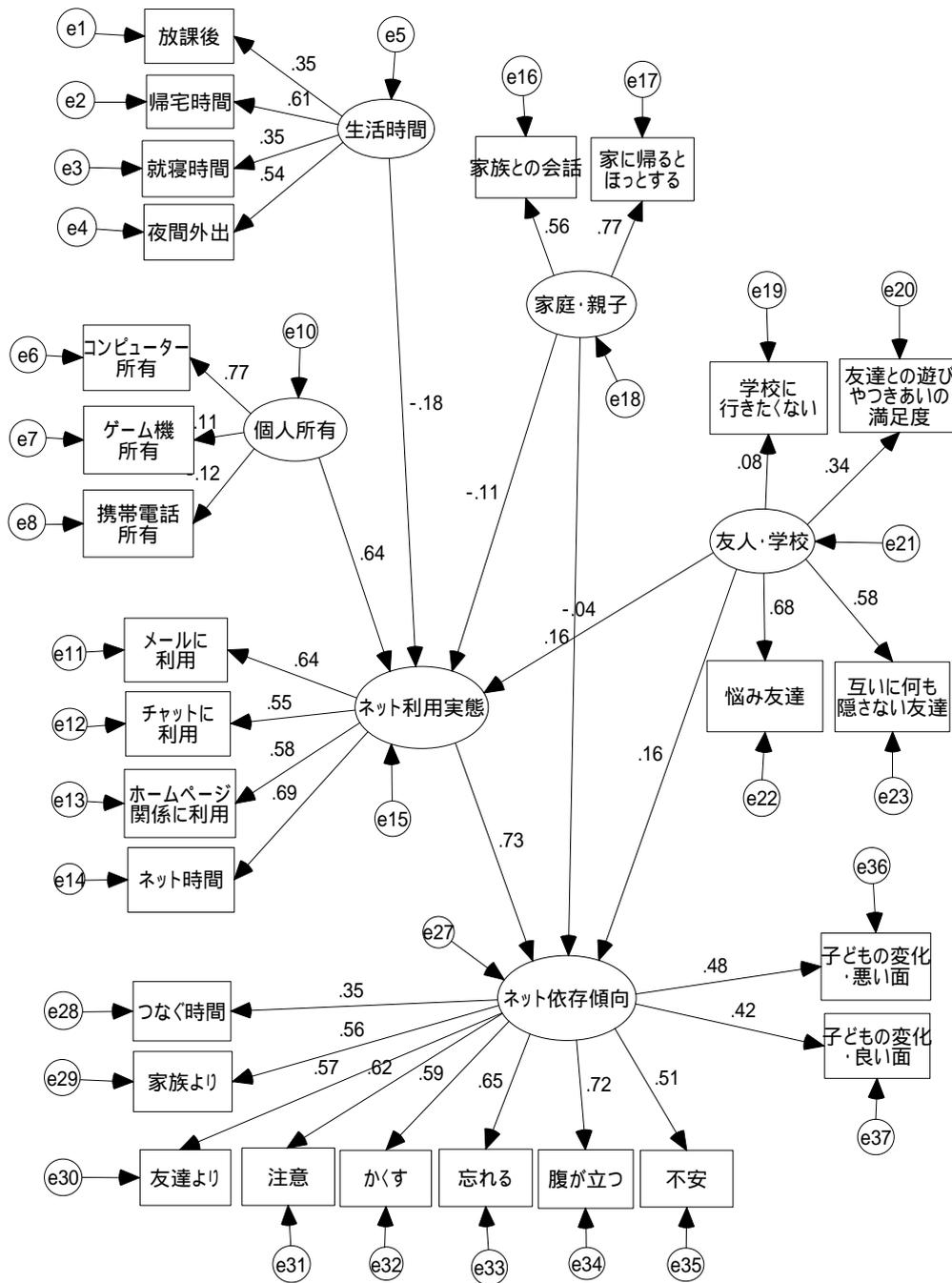


図5.2.2 中学生モデル



RMSEA = 0.046

図5.2.3 高校生モデル

大まかな傾向としては、小中高校生ともに同様の傾向が見られた。「インターネット依存」傾向の構造としてこの分析の結果明らかとなったことを簡単にまとめると以下ようになる。

生活時間が健全なほどインターネット利用の程度は低くなる。

個人所有の程度が高いほどインターネット利用の程度が高くなる。ゲーム機や携帯電話の所有が与える影響は低く、コンピュータ所有の状況が大きく影響している。

家庭・親子関係が非良好であるほど、「インターネット依存」傾向が高くなる。しかし、インターネット利用実態にはほとんど影響を与えない。つまり、家庭・親子関係は利用状況ではなく、インターネットの使い方やその利用による変化に大きく影響する。このことより、家庭・親子関係が良好であれば、健全なインターネット利用が促されるのではないかと推測できる。

友人・学校関係から依存傾向に及ぼす影響について共分散構造分析によりその正味の効果の大きさを見た結果、家庭・親子関係からの効果に比べると小さいものにとどまっており、小・中でその傾向が強いことがわかった。発達段階の初期であればあるほど、子どもにとっての第一次集団である家庭の影響は大きく、インターネットの健全な利用のためには家庭・親子関係が重要な役割を担っているのではないかと推測できる。

インターネット利用の程度が高いほど「インターネット依存」傾向が高くなる。このことは当然の結果とも言えよう。ただ、着目すべき点は、インターネット利用、依存傾向は子どもにプラス面、マイナス面両方に影響を与える。マイナス面が伴うことは仕方のないことと考えられるが、この影響を最小限に食い止めることが、これからの情報モラル教育に求められるだろう。

## 6 . 児童・生徒調査のまとめ

「情報化が子どもに与える影響」について、「インターネット依存」傾向を中心に分析を行ってきた。情報化というと、ともすればハード面が取りざたされがちであるが、分析の結果浮かび上がったのは、人間関係や教育という、ソフト面の重要性である。

コンピュータの個人所有がインターネット利用の程度に影響を与え、さらにインターネット利用の程度が「インターネット依存」傾向に影響を与えていることが明らかとなり、ハード面での要因の効果が確認された。ただ、このことは容易に予想できた結果であったとも思われるし、また、たとえコンピュータや携帯電話の所有が「インターネット依存」傾向を強めるものであったとしても、その所有を禁じることは今日の情報化社会にあってはほとんど不可能である。

ここで、今回の調査結果において明らかになった、「インターネット依存」傾向はハード面の要因だけでなく、人間関係や教育というソフト面の要因からも影響を受けているという結果が、今後の「インターネット依存」への対策になんらかの手がかりを与えてくれるだろう。家庭・親子関係が良好でないと答える子どもは、「インターネット依存」傾向が高かった。「インターネット依存」への対策に限らず、親子間のコミュニケーションをしっかりととり、子どもが自分を受容してくれると感じる居心地のよい家庭を作ることが重要である。また、学校の先生から情報モラル教育を受けた者は「インターネット依存」傾向が低かった。教師による情報モラル教育に対する理解度は決して高くはなかったが、これは、教師が他の教え手と比べてより高度な内容を教授していることや、子どもの習熟度を把握しないままに授業を展開したこと等がその原因と推測できる。教師はまず、ひとりひとりの子どものインターネットの利用実態や習熟度を踏まえながら、高度で専門的な内容をわかりやすく伝える授業の方法を工夫しなければならない。そのうえで、単なる情報機器の使い方や利点を教えるだけのハウツー的な教育ではなく、情報倫理教育、さらには情報機器の利用が人間関係や健康面に与える影響について「インターネット依存」の危険性の具体的な内容を伝える教育を実践する必要があるだろう。インターネット利用の長所と短所の両面を、早期の段階で子どもたちに教育しておくことが重要である。

近年の情報化のスピードは非常に早い。そのなかで、新しいことを受け入れることについては子どもたちの方が大人たちよりも抵抗が少なく、子どもたちは大人たちの気づかぬ内に、情報化社会の一員として様々な情報機器を利用している。現時点では、情報モラル教育は後手に回っており、量的にも質的にも十分ではないといえる。本調査結果をいくらかの手がかりとしながら、大人である親と教師が、直接的・間接的に子どもたちの「インターネット依存」傾向を食い止めることにできることは大きいと考えられる。家庭、学校において効果的な教育がなされるよう努力が必要であるといえる。